青鞜

XII

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

内容

生の神の賜……一……オリーブ、シュライネル
一年間……二……らいてう
昔の男に對して（感想）……三……西崎花世
薄暮の音樂（詩）……三九……望月麗
徹底せざる婦人問題に對して（感想）……四一……丸島春枝
わがまま（小說）……五一……野枝
粉雪（小說）……六八……小林哥津

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ソニア・コヴアレフスキー自傳……七五……野上彌生譯
天日に（短歌）……八九……三ヶ島葭
青鞜社詠草……九八……川田よし等
イワノフ（戯曲）……一〇四……瀬沼夏葉譯
本郷座の孤城落月……一一三……木兎女
市村座の丁字みだれ……一二六……あげは
新刊批評と紹介……一二七……
編輯室より、其他……一三〇……

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

生の神の賜

オリーブ・シユライネル

一人の婦人が眠つて居ました。そして夢を見て居ました。

生の神が兩手に賜を持つて現れました。其の賜は片手のが愛で片手のは自由でした。神は婦人に向つて徐に口を開き

「選め」

と申しました。婦人は稍暫く考へて居ましたが

「自由を」

と答へました。生の神は莞爾として

「汝賢し」

と申しました。それから又語をつぎ

「汝もし愛を願はゞ、我汝に愛を與へしならん。さりながら、我再び汝に來らじ。汝賢くも自由を選みし故、我再び汝に歸り來るの日あり。其の時、我は汝に自由と愛を共に片手に持ち來るべし」

婦人は眠りながらニツコリ笑つて居ました。

（わか四）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

一年間（つゞき）—らいてう—

五

二月七月の午後、S社に集つた多くの郵便物の中からKの原稿を見出した。

「『斷片』として今送ります。ともかく『斷片』の命をおあづけしました。生かして下さいましても、燒いて下さいましても私は嬉しいのです。」

といふ葉書と一緒に。

斷　片

○

○○○○と○○○○○○○！

こんな生々しい言葉を聞く事が、知つたことか、敎へられた事が、私は數へ切れぬ程う

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

れしい。たまらなくなつつこい。私には丁度肉を解し、肉を知つた男か、女かの様に楽通りして此の生々しい血の通つた言葉を聞かれる。

○○○○○○○○○、今にも燃える様に見える。○○○○○○○○○○今にも血がニヂミ出さうに考へられる。

○○○○○○○○は立派な自然の藝術品だ。私はこんな立派な藝術品を見出す事がたまらなく恐ろしい、嬉しい、なつつこい。

○

九つの春だつた。

（春と呼ばれる雪國の春はまだまだ寒い。）

越前町の由ちやんが角笛を呉れた。

私は土藏に立つてビイビイならして見た。

雪が降つた朝だつた。

由ちやんは私より四つ上だつた。鍛治屋の子供。

『アンネ嬉しいけ！　嬉しいけ、嬉しかつた、又あげるよつて、あんたわしの言ふ事聞い

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

てくだはれ。聞かれんと其の笛こつちへ、かへしとこ？　ね？　あんた返へすの、いややろげ！　ね？　俺の言ふこと聞かれるか？　ね？』

笛の音が大好な私は返へせと云はれた由ちやんの言葉に合點して見せた。

由ちやんの頼はこう言ふ事だつた。

今夜、お月さまが出たら友達と私の家の處迄來るから土藏の二階を内密で貸して呉れ、そして二階で用事が濟む迄番をして呉れ。と、これだけの話だつた

私はなんの用事か由ちやんに聞いたら、

『あんたの知らん事、いまに大きなつたら、わかろう』と言つて呉れた。私は見張りと角笛とかえことしてしまつた。

夜が來た！

月も出た。朝の雪はまだ消えてゐなかつた。庭に出て。月の明さと屋根の明さをヂイッと見た。黒い猫が二匹隣りの屋根に隱れた。ケタタマシイ啼聲がそこから聞えた。

由ちやんは澤山の男の子と女の子を連れて來た。

どれも皆私より年が多い。

目の色が爛れそうだつた。

燃えさうだつた。
そして一組、一組ませた男の子と女の子がピッタリ寄り添つて入つた。
色の黒い、光りのにぶい蠟燭を持つて土蔵の二階に立つた。
由ちやんの眼は朝より尖つて、尖つてゐた。
一本の蠟燭を渡して、私は下の入口に獨り立つた。二階からは一度に温い、渇えた様な魔の聲がきこえた。
私はにぶい光の先きを見つめたまゝ、冷たい、寒い入口に腰かけた。
パチパチと油がはじいた。
雪がきれいに見えた。私の心は妙にそばだつた。

……………………

二階の人の聲もきこえない。音もない。私は悪い事と思ひつゝも音たてない様に…明りを消して二階を見た。
刹那！　幼い私の官能は一方ならず痛み出した。…………〇〇〇〇〇〇！
少さな異なつた肉塊は凡て〇〇〇〇れてゐた。
蠟燭のローはヂリヂリと爛れる様な音をしてコロガツタ人のあたりを酔はせてゐた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

私は息もせず幼い心の顫へを兩手でヂイツト押へた。

○

自叙傳を讀む。

草平といふ人は氣の毒な人と思ふ。

草平と云ふ人はあまりに藝術化して人を作りたがる人だ、換言すると、自分の思つたまんまの返事かほしい樣に。

女と、赤い鳥を讀む。

三重吉と云ふ人は暗い氣分にさぐりを入れてゐる人だ。挿話の氣持よく行く人だ。ともかく會いたい人、知りたい人。

○

或る女が私を戀した。

女は人の妻だつた、女の兒を持つてる人の妻だつた。

私は無理からに『俺』といふ枯れた古ぞぼけた字を拾つて女に渡した。

『永久』と云ふ至極むづかしい條件と一所に。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

女からは早途『死』といふ恐ろしい冷たい黑い字を送つて來た。『俺』と云ふ私は只黑い字を手に載せた。そして暗い『死』といふ字を考へてしまふと世の中の凡が道化物の樂屋の樣に思はれて來た。

今も猶、私は休みなく暗い字のつながりを恐ろしがつてゐる。

女からは——絕えまない古傷のいたさを知らして來る。

私はいつ迄も、いつ迄も『永久』といふ形に囚はれた返事をしてゐる。

○

人間はやつぱり利口だ。

猫より利口だと思つた。

每晚戀猫の啼聲で落付く事が出來ない。

つくづく動物の淺間しさを知つた私には、どうしても人間の方がゑらいと思へて來た。

人間はやつぱり裏と表を上手に使い分る利口なものだつた。

猫より矢張ゑらかつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

○

原稿は居合せた人達の手から手に渡つた。

『たいしたものね』『男でせう』『厭味だこと』『こりやあ早速發賣業止ね』『全くだわ、はははは』『だがおかしな人ね』『でも眞面目かしら』こんな會話が笑聲と一緒に一時交換された。中には『とても出せないでせう』と眞顔で云つて讀みづらさうに下に置いた者もあつた。ともかく皆が少しあてられたのは確なことであつた。

私はまたこの女のことを考へずにはゐられなくなつて來た。原稿を持つて家へ歸ると、今一度讀んで見た。奇抜な誤字がそこにも、こゝにも平氣で使つてある。紙の端には『我儘な私の一直線の個性の一つはこんな處に迄私をのぞかせます。けれどうれしい。決して苦痛とは思はれない』などゝ細い字で書いてあつた。三四日前に受取つた「出來上つた原稿は屹度放縱性を帶びた我儘より出てゐないと思ふ、とにかく私は只『私』といふ壁の內から外を見ないで特種な囚はれない字と格で生立ちたい』と書いてあつたハガキと思ひ合せて、思ひきり幼稚なところと、獨り得意がつてゐる處に云ひ知らぬ愛嬌を無意識に示してゐるとおかしくも思はれたりしたが、何となく不快なものだつた。いつか私はまたいつものむづかしい顔をして、全體に一貫してゐる氣分、この女の興味の中心となつてゐるエロティ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ックな或ものの中から何ものかを見出さうと目を見張つてゐた。大阪の町に住む肉感的な女、風儀の惡い地方に育つて早つから男女間の色々なことを、見たり聞いたりして來た女、自分は未だ何も知らぬ處女でありながら、性的な空想丈を多量にもつて好んでさういふことを云ひたがる女、私はあまりいい感じはしなかつた。けれどそれが男でなくて、女であるだけ、不思議でもあり、珍らしくもあり、從つて矢張り興味あるものであつた。

六

からッ風が烈しく吹いた二月十九日の午後だつた。

『Aさんが入らつしやいました。』といふ取次の女中の言葉に私は眉をよせた。Aその人を嫌つてゐるのでは決してないけれど、讀書の時間を又妨げられるかと思ふと少しいやだつた。未練らしく机の前を立つて、次の間に行くと、緣側を通つてAがはいつて來た。並外れて大きな女が後に續いた。

私は紹介される迄もなくすぐあの手紙や原稿の筆者だと知つた。

ふたりの女は部屋の入口の隅の方に火鉢を中にして並んで座つた。暮れ易い冬の日はもうそこを薄暗くしてゐた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

初對面の挨拶を簡單にすませて仕舞つた後、三人は一寸だまつて仕舞つた。

私は書いたものを通して心の中に形作られてゐたKと今目の前にゐるKとがあまり違ふので、不思議な氣持がした。そしていつまでもKから眼を離すことが出來なかつた。

成程大きな女だ。男のやうな女だ。といふよりも大きな、大きな小供だ。五尺にあまる身長に相應した豊な肉付で、頭も、顏も、手も、何もかも思ひきつて大きいが、それでゐて、人を壓し付けるやうな強い感じは與へないで、まるで生れた儘でぷうつと膨れて來たやうだ。何處を見ても無理な處がない。

私は只々いゝ感じがした。書いたものから受けた厭な感じはすつかり消されて仕舞つた。そしてあれらの手紙に對して疑ひ深かつた自分を心に恥ぢることとさへした。

『度々御手紙をありがとう、いつも面白く拜見してゐます。けれど筆無性でつい御返事もしませんで。』

こんな言ひわけのやうなことまで口に出た。

人に接することの下手な自分は取り分け相手が年下で、初對面で、向ふから何も言つてくれない時ほど手持無沙汰なことはない。と言つてあんまり長く無言つてゐるのも何だか自分の義務を果さない時のやうな濟まない氣もするので、何かかにか見付けては努めて話

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

す。強て話すのだから時には心にもない空虚なことや、嘘も交る。すると言つてるそばからそれで又氣が咎められてゐるから人に面會するほど自分にとつては骨の折れる、そして疲れることはない。

けれどこの日も雜誌の現狀や、將來の希望や、社員のことや、其他一般の女に關することを相手の心を計りながら話した。近頃興味をもつて讀んでゐる死後の生活に就いても話した。

二人とも多くは只だまつて聽いてゐた。Aもこの頃はまだ左程私と親しくなかつたから。

Kは男のやうに鼠の縞セルの袴の膝を割つて、右手を腰のあたりに支へ、長い胸を氣持よくそらしてゐるが、首丈はいつも垂れて、眼は疊の上の一點を見詰めたまゝ瞬さへもしさうにしない。それが羞しさからではなく、何か深い考へに沈んだ人か、さもなければひどく感激して見惚れ、聞惚れしてゐる人のやうだ。その態度、その姿勢、何處までも落着いてゐて寸分の隙を見せない。私は何かしらこの女の中には偉大なものが潜んでゐると思はずにはゐられなかつた。久しく自分の心にもつてゐた或アイデアに今目のあたり出逢つたやうな心持さへした。そしてこの女がS社の社員だといふことを再び心に悦んだ。すると並んで座つてゐるAが只フワ〳〵とした子供のやうに見えてふたりが一つ違ひの友達だと

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

いふのが不思議に思はれる程だつた。

段々にいくらかくつろいで來るとKはロダンの展覽會を見にわざ〳〵上京したのだが、作品の前に立つたら涙が出たといふやうなことを言つた。

それから何かしら眩いものでも去けるやうに私に面を背けてAと話し出した。それは大阪にゐると、いつも夜の道頓堀をひやかしに出かけるが、マントを着て風を切つて歩くと男と間違へられるといふやうなことや、銀貨ばかりポケットに一杯入れてヂャラ〳〵音をさせながら町を歩いて見たいといふやうなことや、淺草へ銘酒屋の女を見に行きたい、金をやりさへすれば身の上話がきかれるだらうかといふやうなことだつたが、どうもそれが私にはほんとうにAと話したくて話してゐるのではなく、私が聽いてゐるといふ強い自覺の下で、私に聽かせるためにAに話してゐるものらしく思はれた。

そこには只理もなく面白いといつたやうな調子と、輕浮なといふよりも或子供らしい得意とがあつた。私は他の女の口から出ると寧ろ齒の浮くほど厭味にも聞えるやうなこんな話がこの女の口から出ると何故かう皆罪のない戯れとなつて仕舞ふのだらう、抔と思つた。Aは面白さうに調子を合せてゐた。私は氣の上らぬ顏付で一言二言の冷かしを云つてゐた。

その夜、私は日記の一節にこんなことを書いた。

『あの人達にはまだ純な可愛らしい處がある。ほんとうに心の若い呑氣な人達だ。世間といふものをまるで見て居なかつた卒業當時の自分を見るやうな氣がした。殊にKは子供の無邪氣と、少年の好奇心と情熱とを有つてゐるらしい。得易からぬ女性であらう。自分の想像とは違つて少しも厭味な處のないのはうれしかつた。云々』

翌日の夜、またKはひとりしてやつて來た。前の日の歸りがけに今夜にも大阪へ歸るやうなことを云つてゐたから、折角來たのに今少し遊んで行つてはとか、今一度ゆつくり話しにいらつしやいとかいふやうなことを云つたには云つたが、それは大して意味のないほんの御世辭に過ぎなかつたのだから少々意外だつた。何て眞正直な人だらうと思はずにはゐられなかつた。

Kは私の顏を見るなり、辨解らしく『――館へSの賣上高の殘金を取りに參らうと思つて伺ひました。それに四月號の表紙を描くについて御伺ひして行かねばならぬこともありましたから。』と云つた。

其夜は前の日よりも多く話した。量のある、幅の廣い、氣持のいゝ聲で、はつきりと話すけれど、矢張り、堅くなつて身動きもせず、いつも目を伏せて、一度も私の顏をまともに見る

ことをしない。それといひ、これといひ、何かしら強い壓迫を感じてゐるらしい樣子だつた。

『四月初めには屹度東京に出て來ます。そして東京の人になります。その時あなたに聽いて頂かねばならないことがあるのですが、それ迄どうぞ待つて下さい。今から御願ひして置きます。今日はまだ云へませんから。』

こんなことを幾度か念を押して言つてゐた。かういつた時のKの妙に興奮してゐるらしいのに氣付かないでもなかつたけれど、私には何のことか全くその意味が解せられなかつたので、獨呑込みな、變なことばかりいふ人だと思ひながら、『それぢや四月を御待ちして居ませう。ええ、どんなことでも伺ひませう』といつて置いた。何事だか多少氣にならないでもなかつたけれど、こつちからわざわざ尋ねて見るのはいやだつた。何だかおつくうなやうな氣もした。ふたりの氣分の間にはあまり隔りがあつた。

それからS社の事務所に電話を設けるやうにしやう。伯父に話して寄附させやうとか、時計の面白いのが二つあるから大阪へ歸つたらすぐ一つあなたに御送りするとかいふやうなことも云つた。

まだ今日で二度しか逢はないこの女から何でそんな物を貰ふ理由があるのか、物をやつたり、とつたりするやうな面倒なことの嫌いな私には何のことだかさつぱり分らなかつ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

た。けれど折角やるといふものをぐず〳〵いふにも及ぶまいと思つて、だまつてゐた。九時過ぎ頃Kは殘金を受取るに入用なS社の印を持つたり、その金額を手帳に記したりして、歸りさもなささうにしながら歸つて行つた。

朝起きるといつもの習慣で玄關に立つて郵便受函の方を覗いて見た。何か白いものがはいつてゐるらしいので、ぬぎ捨てゝある下駄をつッかけて取りに行つた。それはKからの手紙だつた。私はそこですぐ開封して、讀みながら玄關の方へ戻つて來た。

『大變遲く迄御邪魔いたしました。ヒシヒシと私の身體と云はず、心迄なにかゞ今しめつけてゐます。私は――今夜あたり生れましよう――ともすると死にましよう――何度書いても私の心は亂れてだめなのです。私は今日全くRさんの凡てに打負されてしまいました。なんといふなさけない女でしよう。どうしてこんな弱い女なのでしよう。自分は四月を待たず二月の今日再び御目にかゝつて、全く私の或物を二度と修復の出來ない樣、二度と起上ることの出來ない程に傷け、痛み出させて下さつた事を深く深く謝しました。生れる時が近くなつて行く私は今日といふ紀念す可き物を受けた事をどんなにうれしく思つてゐるでしよう。とぎれとぎれになつた私の血の皆は、はつきり記憶さ

れてゐる今日のRさまの一言一句によつて、少しづつ集つて來さうです。

なんといふ弱い女でしよう。

なんといふ馬鹿氣た女でしよう。私は今。苦しんでゐます。非常に苦しむでゐます。

これからでも伺つてなぐりつけて頂かなけりや、恐らく其苦しみは去らないのです。私は御弟子にでもなつた氣で歸つて來ました。馬鹿と云はれても、弱いといはれても。

短い言葉で、ハツキリ、立派にRさまに御答へする時の來るのを待つております。私は來るのを信じます。

御話した通り、私は自分の申し上げた言葉の或部分について、今非常に、非常に心配してゐます。けれど四月迄私は默ゐております、そして四月に御目にかゝつてハツキリと御詫びします。

今日のRさまの凡てが私の心にハツキリ映つて居ります。聞えて居ります。一言一句間違なく。――私はとにかく長い、長い階段を上つてそしてRさまにお目にかゝつたら間違がないのでした。

私は、自分で苦しむ樣に自分で作り上げてしまつた。終りです。本當に私は生れて來なけりやだめなのです。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

まだ私は書きたいのです。けれどそれには非常に長い時間が入用です。今の私にいくら時間を與へたつていゝ事は書けません。勿論思つたことなんか書けないんでんが。時間は貴重です。

私は歸へる日を待つて居ります。二三日中には少しく私といふものを出して見ます。御覽になつた通り、私は今みんなが亂れておりますから。後から考へて又心配するやうな材料を捕まへるかもしれませんから、もう申しません。氣がすまないまんま。

澤山あるんです、書きたいことが。私は筆を置くことがつらいのです。

K

Rさま」

一體この手紙は何を語つてゐるのだらう。何だつて私に對して、私を相手にしてこの女かうまで興奮して、ひとり騒いでゐるのだらう。この誤字といひ、脱字といひ、重複といひ、この女自身がいふ通り確に心の亂れてゐることを證據立てゝゐる。

私は圓窓の部屋にはいると机の前に座つて、いくらかドギマギした心で今一度讀み返しながら、又してもこの女は一體何ものだらうと改めて考へねばならなかつた。

昨夜も頻りに四月、四月と云つてゐた、自分の云つた言葉について今非常に心配してゐ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

るといふのも多分あれを指してゐるのだらう。それにしても四月迄悶へてゐるとか、四月御目にかゝつてハッキリ御詫びをするとか、短い言葉でハッキリ立派に御答へする時の來るのを信じてゐるとか言ふのは何事だらう。いよ〳〵變な女だと思つた。若しこれが異性ならば判斷するに左程難くはないのだが、同性な丈に却て見當がつきかねた。併し彼女自身も自分何故興奮するか恐らく意識してゐないだらうと思つた。

七

『大阪についた今朝は雨が降つて淋しいでした。

昨夜新橋を立つた私は一睡もせずにお目にかゝつた日の事ばかりそれからそれと考へて見ました。

私はどうしても東京に早く出たいのです。凡ての事は全く私を東京にまで再び送り歸へして來なけりや解決がつきますまい。』

二三日するとこんな葉書に續いて重い封書と小包が着いた。小包は先きの話の時計で、封書はその說明書であつた。私はうれしくないではなかつたけれど、そのうれしさには何處か快くない不安が添つてゐた。第一私にこんなものを送つてくる先方の氣が知れない。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

私といふものをよくも知らないで、只色々のつまらぬ世評や何かから私の上に多くの興味や好奇心や、期待を有つてゐるのだとすれば有難迷惑でもある。物品で御機嫌を取らうとするのならば私はちつとばかり侮辱されたといふものだ。けれどそんなことは考へたくない。只私にくれたくてくれたんだと思つてよろこべるものならよろこんでゐたいとも思つた。

ともかく、時計は私のまだ一度も見たことのないほんとうに珍らしいものだつた。そしてすつかり氣に入つて仕舞つた。出來る丈無雜作に思ひ切つて單純に出來てゐて、卷くといふ世話もない。それでゐて正確に時間が分るといふのだから、自分の氣分とすつかり合ふやうに思はれて無暗に面白いものに思はれた。こんな長い鎖の下つた柱時計を西洋の繪畵の中で曾て見たことがあつたやうだがそのときはこれが昔の時計かしらと思つてゐた、この世紀にまだこんな時計を見られるのかと思ふと只それ丈けでも惡い氣持ちはしなかつた。

時計は圓窓の部屋に續いた自分の應接室にあてゝある茶室の柱に、鎖の疊に觸れぬ程に高く掛けられた。焦茶色の木のあらぼりは暗い砂壁とよく調和して落付いた感じがした。

私は叮嚀な圖解までついた說明書を側に擴げて、振子を付けたり、鎖を手繰つたり、分

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

銅を下げたりした。坊やもいつか出て來て、

『伯母ちやん、なあに、これ。え、伯母ちやん、これ、どうしたの』と云ひながら側に立つて見てゐた。

『いけない、いけない、そこを引張つちや。御時計が壞れて仕舞つてよ。』

坊やが面白がつて鎖を引くのを制しながら、私は矢張り物珍らしさうにしばらくはたつたまゝ時計を眺めてゐた。

それからは毎朝起きて雨戸を開けると鎖を手繰つた。卷く代りにそうしておきさへすれば止りつこはなかつた。机の前に座つてゐるとその當座はセコンドの音が耳について離れなかつた。チクといふ音とタクといふ音との長さや强さの差異によつて時計の位置の見えぬほどの『ゆがみ』さへ氣付くやうにいつか感覺が鋭敏になつて行つた。

或日私はKのことをぼんやりと心に浮べながら、我れ知らず、その音に耳傾けてゐる自分を見出した。ぢつと見詰めて居ると、心の影と音とが妙に絡みあつて、溶け合つて、一つものゝやうになつて行く。

私の心は大變靜かであつた。久振りで詩でも出來さうな氣分になつて來た。紙をのべて數行ばかり書いたが、氣分ばかりで思ふやうには出來なかつた。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

で、私は其筆でKに時計の御禮を出した。そして近い中に時計に關聯した詩を御目にかけるかもしれないと書き添へた。

其後――館の集金の事に關して二三回手紙やハガキで問合せの催促が來た。少し許ではあるしされなければ取れないでもう仕方がないと私の方では諦めてゐるのだけれど、Kが熱心に、又親切に言ふのを捨てゝも置けないので、とうと局や社やその他を問ひ合せて見たりした。

『集金事件はどうなりました。裁判沙汰にして一度Nさんに法庭へ立つてもらひたい。そして同人がそろつて傍聽して見たい。』とハガキで言つて來た時には皆笑はせられた。(未完)

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

昔の男に對して　――西崎花世――

○

何が今日の此の心に加へられるであらう。朝になると私はいつも今日の日が、私の命に何を加へて呉れるであらうかを思つて胸の燃えるやうな心持を感ずる。

私は昨日色々の事を忍んで暮した。私の心は今日の日に何が投げ込まれても可成たぢろがぬだけの覺悟と準備とを持つて昨日一日を送つた。昨日の心の忍從と準備との上に、今日加へられるものが何であらう。それがパンであらうか、また石であらうか、私はそれを思ふとき、心のしびれるやうな悲しい好奇心と、喜ばしいやうな興奮とを感ずる。今日の私は兎に角その加へられるものをこの心に受けとりながら、それを消化してまた明日の日の忍從と努力とを怠つてはならぬであらう。

何が加へられるのであらう。

加へられるものが何であつても私はそれを怖れては居ない。それが私を泣かせるものな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

らば、私はそれの中から笑を見付け出す事が出來る、若しそれが私を喜ばせるものならばその喜びの中にも猶悲しみを思ふ事が出來る。冷笑も、蹂躪も、戀愛も、罵倒も皆その中に私の欲しいものがある事を信ずる事が出來る。凡てのものが來る事が正しい。

何が私に加へられても私は決して狼狽しないだけのこの心の仕度が出來てゐるだけの自信のあるのを感ずる。而してそのものが、どれだけ私の感情を震動させても、それが私を殺害しやうとして來るのであつても、また私を慈しみ温めるものであつても、黒白ともにその價値に差別のない事を思ふ事が出來る。

私は躊躇せずに來るものを受け取るであらう。此の心に加へられるものは清濁ともに復雜であり、多樣でありたい。出來るだけ私を苦しめるものが集つて來るのがいいであらう。

私はそれをよく征服したいと思ふ。私はそれに克つ事が出來ると思ひ得る。

私の朝の祈りは――自己に對する祈禱――はいつも此の心持である。

○

私の心が崩れてゐたから彼の男が現れて私の崩れた心に乘じたのであつた。

昔のあの男から受けた苦痛が私をまだこのやうに痛めてならない。然し私が惡いのであ

つたのだ。あの男の輕薄な性格が見えない事が惡いのであつた、むしろ今の私の心が昔の男の輕薄からその價値を見付けだす事が出來ないと云ふのが惡いであらう。

私の心が荒れてゐたから、あの男が現れて私に住んだのであつた。私の生活が下劣な生活であつたから、あの下劣な心が私を所有したのであつた。人が私を汚したのではない。私を汚したものは本當に私自身である。私が私自身に玩弄を買ひ、嘲笑を求め、罵倒を受け取る必然の道を歩いてゐたのだ。私は憎むべきものが自分である事を感ずる。私は私の面上に烙印せられる此の大きい汚辱をとりけすすべのないのを感ずる。

何故自分が乘じられるやうに崩れたらう、何故自分が玩ばれるやうに亂れてゐたのであらう。何故自分があれ程までに賤劣であつたであらう。

私は私がそのやうに亂れた理由を知る事が出來る、そしてそれが私の心を革命させる運命の意志であつた事を思ふ。私は私の崩れてゐた事が私の歩かうとする第一歩であつた事を考へてゐる。

然し何と云ふはかない苦しい悲しみの道であらう。一步一步淚をもつてあがなふやうな步行しか許されない自分がむごたらしい。汚辱の中から伸びるより外に伸びやうのないこの心があまりに悲しい。私は私をふみにぢつたあの男を見つめて意味をさぐりながら死に

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ゆくであらう。あの男の不信とあの男の輕薄さを理解の上に愛しやうとするところまで、この心は苦しむであらう。然しこの苦しい大きい此の類の悲しみは生きてゐる命のための租税のやうな悲しみである。

○

私は常に私の心の上にかぶさつて來る汚辱（私の云ふ汚辱は自己の下劣性に對する苦痛の感情である）を感ずる。

私は靜座する時いつもその汚辱がをりて來て、私を見てあざわらつたり、おびやかしたりするのを感ずる、而してその汚辱が聲をあげて、辱多きもの、野卑なるものと呼ぶのを聞いてゐる。私はその聲を心に感ずる時、身體がふるへ、火の上に燬かれるやうな赤面を覺える。そしてその時ほど自己の生きてゐる事に對する不快の強い時はない。

この女は生きてゐては惡い。この女は既に滅びねばならぬ女であらう。多くのすぐれたる女の群れからおしのけられて、唯一人汚辱に面を染め、野卑に身を濡らして、賤劣な乞食の群れにまじるより外はない女であらう。この自覺の苦しさは云ひ現すべき言葉がない。

然しこの苦みの底に動く心がものを拾はうとするのを感ずる。自分をふみにぢつて置い

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

てそれをいたはらうとする自分のあるのを感ずる。僅に殘されてゐるものを集めやうとする。破壊のあとを受け取つてものを建てやうとする。この心の事實は正しい報告である。而して痛ましくあはれな自已に對する愛である。

一方には存在を否定しながら、一方には自已の存在の價値を造らうとする努力が生じて來る。これに相違ない。生きやうとする力といふのがこれに相違ないと思ふ時漸く涙を拭ふ事が出來る。

私は私に汚辱のある事が悲しい。然し、また私が汚辱のために研かれて生きてゆくのを喜ぶ事も出來る。

○

集めては切り離し、牽き引せては伸ばしてゆく、生活の快樂は切り離す刹那、心を伸ばしてゆく時にのみ私に訪れて來てくれる。

集めたものの多い時、切り離す刹那の光りが強い。それがどんなに嬉しい事であらう。集められるだけは極力それを集め、切り離す時には極力それを切り離したい。集散ともに猛烈でありたい。この態度はいつまでも大膽でありたい。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

私は今私の心も私の實生活も手をたづさへて苦しい底に落下してゆくのを感ずる。日に夜に暗いどんぞこにおちてゆくであらう。そしてものを集めて來るであらう。

忍ぶ事は決して樂な事ではない。忍從する事は酷く苦しい事である。然しそのあとに來る偉大(おほき)い光がある。火蓋を切る。矢が弦をはなれる。堰かれたものが流れ出す。さうした快感は、今の忍ぶ事の苦しさに倍した樂しさを持つてゐる。私は私の今までの實際の生活から、その忍從と躍進との消息に可成慣れて來たやうな自信を感ずる。

忍從の生活が、そのどんぞこに極る時に、はじめて生きやうとする力が激しく起る、その生きやうとするどんぞこの力でなくては、良(い)い力だとはおもはれない。忍從する事は苦しい、然し躍進する樂しさがどれだけ嬉しいであらう。

落ちてゆけ。底まで落ちてゆけ、ものゝ集る底まで落ちてゆけ。

○

私には私が過去の經過中に所有する事の出來た多くの男の心が見えて來る。その多くの男の心が私の生きて來た命に木を投じ、油をそゝぎ、薪(たきゞ)を加へ、土を投げ、水を投じてくれたやうな連絡を思ひ出して來る。多くの男の感情と態度とが私の身のまはりを圍繞して

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

私を促進させてくれた事を感ずる。

私が愛さるべき素質で生きてゐた時、私を愛するために現れた男がある。私が私の愛を外に發しやうとする時、それを受け取るために現れた男がある。

唯憧憬のために、唯衝動のために、また唯荒廢のために、私の心が人を求めた時、その人は必ず與へられて來た。ある人は私に景慕させて美しい思出を置いた、ある人は私をふみにぢつて汚辱の中に殺さうとした。

私の質に心のくづれのあつたとき、虛に乘じて現れた男がある。

私は私の多くの男を思ふ時、私が益々すぐれたる男に就いて、自分を研くやうにして、このところまで生きて來たのであると思つた。より高き處に、より美しき處に、私は今はもう自分の求めやうとする心を理解する事が出來る。

私が高く心を引き上げる熾烈な要求を持つやうになつた時、私はすぐれた人の生活を觀る事が出來た。求めよ、然らば與へられんと云はれてゐる事は私のための眞理であつた。

私は私の求めるものを與へられて來た。私は私の育つて來るがために、多くの男の心を潜つてこの處まで進んだ。然し私はまだ進んでゆきたい。この心は更に育つてゆきたい。まだこの感情を高め、この智慧を擴げてゆかねばならない。そのために私はまだ多くの男

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の心を求めて生きやうとする。

多くの男の心がほしい。すぐれて偉大なる心がほしい。それが私の心を育てゝくれなくてはならない。この人を求める心は私の生命をつながうとする生命がけの事である。

唯あるとき私は私のこの人の求め方が、淫婦の求める心と區別を知る必要を感じた。或る人が私のこの男に對する心の飢えを、精神的淫婦と名付けるかもしれない。私にもある時に不透明になる私の心が、その杞憂を持つて來る事がある。然しその杞憂の底まで落ちて、押し返して來る私の正しい判斷は私にいつも肯定を與へてくれる。

私は何に對しても論理的にものを考へる事の出來ない女である。この求め方がさうであるか或はさうでないかを論じ知る明晰な頭が私にはない。たゞ私の直覺的な斷案が、さうでないと決定してくれる。

私のほしいものは男の質の中にある自己のあるものに過ぎない。ある男から私のほしいものは只唇であつた、ある男から私のほしいものはその眼であつた、しかし私の心の育つて來るとともに私は聲をほしがるやうになつた、言葉をほしがるやうになつた、その心がほしい、その思索がほしい。その生活の光りをほしいとおもふやうになつた。

私は私が二人の男から同時にものを取り出した事のない事を明かに云ふ事が出來る。そ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

れは私に同じ時代と同じ日の心とが二度とは現れなかつた事が確かな裏書をしてゐる。私の求める態度にはいつも全力的な火が燃えて來た。眞實の血が流れてそれを求めた。

私は今男の言葉を求める。そしてその生活の光彩を求める、同時に私の求めるものは男でなくてもいゝに相違ない。私のこの心とこの境遇とに良い香を泌しみわたらせる人格ならば、それは女であつてほしい。

さう云ふ女が日本にあるならば、私はその女を求めると云はう。然しおそらくはそれがあるまい。日本には女と云ふ女はあつても、人と云ふ女がないからである。

それがどんなに淋しいことであらう。そして私のこの心はいつまでか、男の中にばかり人を求めて生きてゆかねばならぬのであらう。

○

ふとすれちがふ一群れがあつた。

その中の一人がひとり笑みをして歩く私の顔の前であはてたやうに大きな顔を見せて、眼を笑はして會釋をしてくれるのに氣が付いた。

その男を私が感じた時、私の心は不用意をおそはれて思はず笑つた。そしてこの男にと

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

うどう此の町で出逢つたと自分に話しかけた。男はとほりすぎた。

私はふりかへつて男を見た。

昔のあの男があそこを歩いてゐる。

とう／＼逢う事が出來た。

どうして彼の男はあの眼で笑つたらう。あの會釋した心持が何であらう。

まつたく三年ぶりに出逢ふ事が出來た。

あの眼は昔のあの眼であつた。

今のこの心はあの男を欲しがるであらうか。

私は苦しさと珍しさとに燃ゐる心持で、自分にその事を問ひかけた。而して私の心が今の出來事をどう仕末するかを見やうとした。あの昔の男がほしいのであらう。本當にあの男がほしいのであらう。

あの男の唇。あの男の聲、あの男がのこしていつた感覺の記憶が、今のあの男の眼にかきたてられて騷ぐのを感ずる。私は震へてならない。然し私は今あの男がほしいのであらうか。

私は自分に容赦なく、それをたづねた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

○

男は昔のあの時の男よりは肥つてゐた。そしてあの時の私の男よりは世慣れて圓熟したやうな印象があつた。私の男は若くて、はしやいで、浮々して、人の好い輕薄さがどんなに無邪氣にも可愛くも見えたであらう。あの男も年をとつた、そしてあの男は私の男とはちがつた人のやうにもおもはれる。併しあの笑つた人の好い眼は昔の通りであつた。あの眼は私が所有してゐた眼であつた。あの眼は私をふるはせた眼だ。

然し私は今あの男をどう思ふ事が出來るであらう。三年の間私はあの男を此の心の底にたくはへて來た、憎みではないまた愛でもない。たゞ私の苦しみの爲めに悲しみのために、自分の汚辱に顔を打たれる毎にあの男が心に浮んで來た。

私はその時にはいつも命が長くありたい。この命が長ければいつか出逢つて、ものゝ姿を正しくつきとめる事が出來る。この命が長ければあの男の頭上に今一度火を投げ付ける事が出來ると思つて來た。

而して命が長ければあの男に出逢ふ事の出來る事を希望する時、その時の自分の感情や態度や、その男の顏色や眼には必ず不幸な野卑な暗膽たる印象しかない事をおもつて、逢

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

はうとする希望を否定する事もあつた。

昔の男に出逢ふ時、その男は私を見て顔をそむけるに相違ない、そして私の心は更に新しいたちの悪い輕蔑と苦痛とを投げつけられやうと思つて來た。

それが今此のにぎやかな大きい町の中で不用意に出逢つた。そしてあの男が笑つた、私がそれを受け取つて笑はなければならなかつたのは何であらう。私は自分の心に對して云ひやうのない不信を置かねばならないのであつた。

あの男に對して今の私はどう思ふのであらう。私は嚴重に自分をしらべなくてはならない。

○

あの男は何故笑つたのであらう、何故あの男は自分の耻を耻ともせずに昔の女に首をさげたであらう。それが何故であらう。

私はそれを思つてあの男の性格に氣が付いた。あの男の性格はそれより外にはないであらう。あの男はどこまでも責任と云ふ事をしらないだらしのない男なのだ。あの男は正直な心で人を僞る事をする男なのだ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

あの男はあの男の正直で私を汚辱した、あの男はあの男の無智の正直で、今笑つて會釋をしていつた。

○

今私を見て笑つたあの眼を最後の點（ポイント）として、あの男をこの心から始末する事が出來るやうな心持がする。あの無智な正直が私に何を加へてくれるであらう。何故あの男がほしいであらう。あの男の質の中に何があつて私を欲しがらせるのであらう。あの男の中に私のほしいものが何もない。昔からあの男の中には私の欲しい言葉がなかつた。私の慕はうとする生活もなかつた、たゞ私はあの唇にとらへられた、併し今の心のほしいものは唇ではない。

あの男の唇、それは多分他の心がそれを所有する事が正しいであらう。あの男の存在は他の女の心の中心であらう。あの男にはある女が圍繞してゐなければならぬ筈である。

あの男に別れてから私の出逢つた多くの出來事、多くの苦痛の數ほどに、あの男にもいろ／＼な推移や歡樂がなければならなかつた。今の私の心にはあの男の眼もあの男の唇もたゞそれが骨董品としての價値がある。その存在が過去にあつて現在にない。今こゝにゐる私のほしいのは男の持つ『人』である。そしてその『人』はあの男の永久に持つ事の出來ぬ

ものであらう。あの男の中に私のほしいものがない。あの男の中に私のほしいもののないと云ふ事が私とあの男との間の緣をきれいに切り棄てゝくれる。

今のあの眼は私にかゝはりがない。

二人の眼は現在のものではなかつた。

○

昔、あの男は私を所有して置いて、自分の爲めに不利な處で棄てゝくれた。あの男は例のない輕薄で私を突きはなしてにげていつた。それが何といふ無邪氣な輕薄であつたであらう。あの男のあの性格でなければそれが出來ぬ事であつた。

あの男に投げ落された時私ははじめて本當の驚きを知つた、あの男が私を突き離した時私は漸く本當の痛さを知つた。

あの時あの男が私を突き落してくれなければ、あの時の私と云ふものは眼を開く事が出來なかつた。あの男から欺かれなければ私は自分の生命を覺る事が出來なかつた。

私の存在が存在をたしかにしたのは、それからの事であつた。極めて幼稚なところから私が私の人格に氣が付いたのはそれからであつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

あの人はよく私を棄てゝくれた。

人はいつも悲哀に育てられる。悲哀を甞め、否定を正視する事の出來る心が伸びてゆく、心であらう。私に否定をなげつけてくれた男が貴い。私に悲哀を知らした男が貴い。

あの男は私を期せずして育てゝくれた。あの男はあの男自ら知らずに私を敎へてくれた。あの男のそれが私に對して貴い。

これは感情のあきらめではない、高いところに生きやうとする心の努めである。あの男の貴い事を感ずる。

○

私は今まであの男から此の貴重な價値を自覺しないでゐやうとは思はなかつた。私は普通の低い生活の女が、その自分を敎育して居らぬ心で、自分を棄てた男を憎み且つ慕ひ且つ呪ふ困亂を見る時それを下劣に感じて來た。そしてその生活の淺薄とその感情の野卑とをおとしめて來た。

私はあの男をのろはなかつた。私はあの男をうらまなかつた、私は私を棄てたものを追ふ事をしなかつた、然し私は男を殺したいとおもつて暮した。私はそれが憎惡や呪咀から

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の殺害心でなかつた事を知つてゐる。それは私のあの男に對する公けな廣い愛であつた。

あの男が可愛かつた、そしてあの男が殺したいとおもつた、併しその心の反動が却つてあの男を生かさうとした。そしてあの男から別の意味を見付け出さうと努めた。この類の努力は女の持つてゐる本能である。私にその本能があつた。

併しあの男の中から意味を見出しても、それが何かの現象に出逢はない間は、知ると云ふ事が感ずる事にはならなかつた、それを知つてもその知識の中に安座する事が出來なかつた。

今私はあの男に禮を云ふ心持を感ずる。私は、あの男のあたひを本當に感ずる、而してそのあたひを通してあの男を愛する心を感ずる。あの男が可愛いゝ。欲しくない心であの男が可愛いゝ。あの男に幸があれ。

私は私を愛し、あの男をいつくしむ事をしたい。

ものの終局は常に悲しい、然しこの終局の悲しさは私を滿足させる、私は眼のぬれてゆくのを感ずる。

○

私の心は本當に幼い。私と云ふものは今、なにものにも成つて居らない、そして私の手には何もない。今までの閲歴はたゞ生きて來たばかりである、無手で歩いて來たばかりである、この心の發芽は二三寸に足りない。

いつの日が來たら私は手にものを持つて歩く事が出來るのであらう。

（大正二、十一、六）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

薄暮の音樂　—望月麗—

薔薇のうす黄な花に
つきまとふ水のかほり、
水にうく黄な花は
三味線のつめびきの心かや。

はらり〳〵くすんだ楢の葉はおちる、
そらめしてうつピアノのひく音
水に似しかはたれの空をひるがへりて
水の面の波動はゆるくひゞくなり。

悄然とよごれし羽毛ふるひつゝ、
うちふるひつゝ
心からなる音楽に酔ひしれながら
すゝりなくこゝろをひそめて
水鳥はうつろに廣き水の面を
死のみをつくし、かぎめぐる。

うたうたひ。

わが世に身をば投げ出でゝ
日ごと、ひごとのうたうたひ。
あゝいつの日ぞ北國の
ふりつめる夜の雪の上
なじかは知らね、さんげして
絶え果つるとき斷れ雪
かゝはりもなく頰に降らむ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

徹底せざる婦人問題に對して——丸島春枝——

一

女性が新らしい生命に目醒めてたつてから輿論は空前の高潮を呈して、其間に攻難辯論が可成盛んに行はれた。第三者觀たる小數の同情者を除いては多く反抗の聲、擊退の論、果ては眞摯ならざる揶揄の説であつた。然し夫等輿論の聲は女性の對現實を如何に公平無私の心を以て味解し、是に如何に價値ある方針を與へたらうか？ 只徒らに喧々騷々の聲のみ高くして、何等萬人を首肯せしめずんば止まぬ底の發見もなく過ぎんとしつゝあるのである。僅に一部の自覺せる女性が、其外延的發展に多少沮害を受けぬではないが、然し其內心には何等の動搖障害もなく、寧ろ輿論の無爲になり行きつゝある實況に徹しても、今更、得たる自覺の徒爾でない事を鮮明にしてゐる。

從來の婦人思想に大波瀾を起し、一方男性にまで波紋を及ぼしたる女性の自覺とは言ふまでもなく誤られたる因襲、作爲的道德觀念から離脱せんとして、然し同時にそこに女性

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の眞生命を探りあて、自由盛大なる自然美の女性を建設せんとする純なる要求の根源である。女性——延いてなることならば人間全般を益々自然的に生甲斐あらしめんとする敬虔なる努力の發點となるべきものである。

然るに實際衆俗は何故是を反抗視し、何故賛同を敢えてしなかつたらうか？是その因る處は多々あるも要するに第一義的内在生命を認められずに、却つて其外面に顯はれたる技葉事を直にとつてもつて本旨本論のある處と誤解されたからである。其理解が内奥に透達しなかつたからである。尚一歩を進めて其眞相を理解せんとするものあるも、先入主たる因襲的見解を全然脱却するなく、却て夫を當然の準據點と信じて高壓的にしたからである。故に其言ふ處は正鵠を欠き、生命に觸れてゐない。かくて新舊二思想は今や相反目しつゝ流れ行くに至つた。其何れが何れを征し去るかは少くも純一無雜の心境にたち、所有人間に肯定さるべき眞理を把持して動かぬ方に歸着するは當然である。

元より其肯定眞理が何れに存在するかは、將來を待たざれば明言出來ざれども、女性の舊思想に反抗して起つた新思想、其新思想の上に立脚する自覺せる女性は、勿論個人尊重の生活をなすことは言ふまでもない。然らば社會本位なる舊思想と個人本位なる新思想とは、其何れが人間本來のとるべき唯一の道かといふに、社會の爲に個人が生れたるか、個人

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ありて後社會が形成されたるかに想到すれば其疑問は忽然として氷解されるのである。從つて玆に覺醒したる新らしき女性の立場も明々瞭々たるものとなるのである。

二

然し衆俗は未だそこまでに思考を進めてゐないのである。夫以前に通過すべき第一關門の前に蝟集して秘密の內容を種々に臆惻してゐるのである。多くは現實の外面に顯はれたる兩性を比較對照して價値を附し、其價値によつて女性には舊來の女性の道德境遇を確守せしめんとしてゐるのである。さらばその價値とは？

女性は到底男性の水平線下にたつものであると稱し、甚だしきに至つては人間の斷片、男性の破片であると力說して、そこに動かしがたき急所を握らんとしてゐる。是によつて女性を物貨視せんとしてゐるのである。

故に玆には必然の順序として且つ婦人問題の根本要點の解決として、果して女性は男性の破片か否かについて研究する必要がある。此分岐點にして氷解すれば女性の行くべき方向は畧々確定し得るものであるから。

大自然が果して女性を男性の斷片として、或は附隨物として此世界に與へしものならば、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

世の女性たる者は須べからく跪座して、自然と男性との前に屈從すべきである。又夫が當然であらねばならぬ。されど、しかいふ渠等の言論を精細に吟味すれば、何れとして偏見たらざるはなく、淺見たらざるはなしといはぬ譯ににいかぬ、何となれば其據る處は現實に於ける兩性を只平面視したるのみにして、そこには何等時間的眞理もなく、空間的眞理をも内含してゐないのである。時間的は先づ措いて一度視線をより廣き生物界全般に走すれば、そして渠等の筆法を以てすれば、却て雄性(男性)は雌性(女性)の斷片——少くも主に對する副にはあらざるかと思はるゝ實際に遭遇することがある。尙生殖の細微深奥なる顯微鏡的研究に進めば進む程、其念の深くせらるゝは斯界の學徒によりて知らるゝ處である。然し歸納的なる科學は今尙研究の進行中なればとて、其何れにも徒らに偏頗なる斷案を下さない。夫には餘りに前途遼遠なりとしてゐるのである。

翻がへつて靑史を繹ねんか、先輩の間に幾度か反復研究されたる此の問題は一時的の解決はなしとせざれども、萬世の眞理として信賴すべきものに逢着しないのである。かく既往現在の科學哲學を以てしても不可解なる兩性問題は、永久の謎として解し得らるべきものでない。ましていゝ加減の頭腦を以て懷疑時代の局部的偏見により、男性のみ人間なり、女性は男性の斷片、人間の破片なりとするものあらば、其徹底せざる勞力を憐まざるを得な

いのである。

男性は男性である。女性は女性である。勿論、女性は男性なしには眞正の生活をなし得ざれども、男性とても女性なしに生活し得やうか。其一方を欠くとき眞正の生活をなし得ざる兩性に於て女性を欠けば、遂に男性は眞生活をなすことはできないのである。實に男性は女性なしには眞生活より離れねばならないのである。故に兩性が其眞生活に對しては互に絶對の上にたつものにして、性が自然性の儘に發展向上する時、其生活は益々至美、至眞となるものである。

三

されど女性の自覺的思想及行動は、天職を無視し、或は不完全ならしむると杞憂するものがある、元より性交及其必然的附帶事項は自然が兩性に授けたる絶對の法規にして、自然界を一貫して又青史を一流して批議を許さゞる處である。自然の侵し難き威壓にして玆に於ける兩性は互に絶對の價値を有するのである。覺醒せる女性は正に、しかも神聖なる天職の遂行を是認せねばならぬ。

然し現代は余りに女性に對して性慾方面のみを過重視して他の一半をなす人格及智能的

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

方面を無視し、少くも抑壓してゐる、其抑壓され無視されたる方面を打壞して、そこに女性としてより美に、より以上眞ならんと努力すべく顯はれたのが、自覺せる新らしき女である。然るに何等精究する處もなく、漫然と是等女性に、舊套の女性道を唯一の範軌として强ゆる時、往々そこに獨身者の輩出するは止むを得ないことではあるまいか。故に眞に衆俗が自然の女を期待する時、是等の杞憂は徐々に消え去るものであると信ぜらる。

尙女性はたとへ開放さるゝとも到底男性と平行し得るものにあらずとて一切を否定せんとするものもある。

然し凡べて比較と云ふことは、嚴密の意味に於て其根本を等しくせるものならねば意味をなさぬものではあるまいか。女性の開發さるべき智能的程度及方面は男性の夫と優劣を比較すべきものでない。(男性女性の何れが優れてゐても)男性と女性とは既にその性を異にしてゐるのである。女性は男性と比較對照されんが爲に自覺を振り廻はし向上發展せんとするのではない。少くもそれであつてはならぬ。男性を既に女性の完成物として、はた前驅者として全然是を標榜してたつのではない。少くも夫であつてはならぬ。

女性は女性本質の上にたつて自然的女性其まゝに發展すべく努力せねばならぬのであるそこに性交と又他の半面とに於て絕對の女性が得られるのではあるまいか。女性が絕對

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

價に向つて進むべき從來の女性に比して、家庭上と社會上との別なく、より眞實なる女性となり得ることは疑ひを入れるまでもないことである。

以上說きゝたる處を總括すれば、女性も生物の最上境に生活する半面である。故に眞正の女性たるべくそれ自身に企圖し努力するは當然であると思はれる、かく信ずる私は女性自身の開拓者たるべき新らしき志想に生くる女性の續々輩出して、しかも謙遜誠實なる態度と敬虔なる努力とを以つて一步〳〵其道を開拓されんことを冀望して止まぬ一人である。

四

如上によつて女性の自然的立場と將來益々積極的に推移發展し行かざるべからざることは明かなれども、又折角覺醒の曙光には觸れ乍も、現實に對する省察と女性其ものに對する內省とが其眞髓に觸れぬ時は、至當を缺く時は、其上に計畫され企圖さるゝ努力も過半は徒勞となり、空虛と終るものである。

然らば其內奥に深く味到して、隨一無二の點にたち、女性自身の開拓に努力する眞に新らしき女性ありやと云ふに、現在にては遺憾乍明言することはできぬのである。

一部の女性に少くも自己の眼の開いたことは確かである。愕然として永きコンヴンショ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ンの桎梏を脱せんとしつゝあるのも實際である。然し其桎梏を逃るゝと云ふことは男性を對象としての權利、行動、境遇の自由を、解放を絶叫せんとするにはあらざるか、又然らずとするも單に表面的革新に急ならんとするのではなからうか。若し然りとすれば、その覺醒や半途にして、その要求や淺薄なものである。元より舊來の女性より一歩自覺境に入つたことは多とすべきも、私達女性の自覺とは、要求とはしかく表面的のものであつてはならぬ。モット〳〵根本よりの覺醒、徹底せるの要求でなければならぬ。たとへ革新は可とするも根本より覺醒され改造されたる上のものでなければ何の價値を有さうか。

そこに深く根づけられ、そこより發足して努力する女性こそ眞に新らしき女性と稱すべきであると思はれる。

尚、所謂新らしき女といふことは、言葉としても淺薄ではあるまいか。今や一歩を進めて、新らしきと舊きとを問はず、眞の女、自然の女、そのものに向つて開拓され、努力されねばならぬ。新らしき女が立體的となり、深刻化され、徹底化されて、其根底より築かれ、開拓され、向上されて行く事それは、即ち換言すれば矜持に滿ちたる自然絶對の女性が形式されて行くことである。

女性がかく自然絶對的たらんとして奮闘する時、其眞摯、其努力は所有人間の純なる心

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

靈に共鳴を感せしむるは必然にして、其心境に於ては何の反抗、及揶揄を許さうか。

されど、その矜持ある自然的女性たらんとするには可成深刻なる苦痛其ものとたゝかはねばならぬ。まづ深刻に現實を省察せねばならぬ。自己を内省せねばならぬ。さすればそこに展開さるゝ生活の野こそ、かつて夢みし純にして軟らかき心は現實の冷酷なる障壁に觸れて微塵となり失せ、自我は埋沒され、加ふに虚僞なしには矛盾なしには、一日も生活し得られぬミニクサに色どられてゐることを悟るのである。其結果或は煩悶し、懊惱し、絶望の極み辛くも死によつて解决せんとするに至るものもあるかもしれぬ。

しかし其煩悶こそ、絶望こそ、やがて得がたき新生面の母であるまいか。生きんとする人間本來の性に忽然として目醒め其矛盾撞着を除排すると同時に抑壓されつゝあつた他の一面を敬虔なる努力を以て冷酷とたゝかひつゝ開拓し向上し行かねばならぬのではあるまいか。かく深刻に、痛切に、徹底的に自覺ししかも埋れたる自然性其ものゝ爲に苦鬪し、向上し、やがて革新し、更新する女性が――眞に新らしき女性――自然的女性ではあるまいか。

されば從來の如く女性が單に男性の外面を羨望しつゝある間は覺醒も初步である。(男性とはしかく幸福なものではない。それを幸福と信じ苟安するは、信ずる方も信せられる方

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

も覺醒してゐないからである。其虚僞的な矛盾撞着的な生活を絶對無上の世界と心醉してゐるからである）

男性と女性とに論なく自覺が對人生の上にたち、しかも根本より自然の心として是と融溶し行く發展こそ、眞に新らしき兩性の道にして、其一半より絶對的婦人の權威ある自覺、光輝ある步みが生れるにはあらざるかと思はる。

（完）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

わがまゝ——野枝——

關門の連絡船を降る頃から登志子は連れのまき子や安子がいそ〳〵と歩いて行く後から重い足どりでずつと後れて歩いて行つた。この前年の夏休みに叔母とまき子と三人で此處に降りた時には登志子は何とはなしになつかしい家の門に車から降りた時のやうな氣がした。もう九州だと云ふ感じがほんとになつかしみのあるうれしい感じだつた。それが今はどうだらう？　まるで自分の體を引きづるやうにして行くのだ。もう五六時間の後にはあのいやな〳〵落ち付くことの出來ない、再び歸るまいとまで決心した家に歸つて行くのだ。第一に自分の仇敵のやうに思ふ叔父、それを中心にした忌はしい自分が進まうと思ふ道に立ちふさがる者ばかりだ。第二に省りみるも厭はしい、皆して自分におしつけた、自分よりもずつと低級な夫——皆の顔を其處に目の前にまざまざと並べるともう登志子は頭がイラ〳〵して來て何となしに齒をかみならして遣り場のない身悶をやけに足に力を入れて遣りすごした。道々も夢中に停車場に入ると其處のベンチに荷物を投げるやうに置いた。ま

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

き子と安子はうれしさうに荷物をかけて場内を見まはしてゐる。

從姉のまき子は登志子がボンヤリ時間表を眺めてゐるのを見ると浮々した聲で聞いた。

『チョイと、今度は幾時に出るの、まだよほど時間があるかしら』

『さうね。』

彼女は氣乘りのしない返事をして直ぐそこに腰を下した。彼女はどうしてもまき子の聲を聞くと彼女の父の傲然とわざとらしいすまし方をした姿を思ひ浮べて嫌やな感じを誘はれた。ジッと腰かけてゐる間登志子は、一昨夜新橋での苦しい別れを目前に持つて來て眺めてゐた。彼女はたゞもう、四五時間後のいやな心持を考へることの苦しさに堪へかねていろ〳〵な一昨夜までに殘して來た、東京での出來ごとを手探りよせて誤魔化してゐた。然しその間にも小さな切れ〴〵な不快らしい事柄が目の前の光景をチョイ〳〵かげらせた。彼女は一生懸命にそれを避けやうとした。今登志子の暗い心の上に一ぱいに廣がつて彼女を覆つてゐるのは、何時遇ふともしれない別れの最後の日に登志子に熱い、接吻と抱擁とを與へた男だつた。登志子の頭に一抔に廣がつた男の顏は彼女の決心をすてさせた。づる〳〵とこのいやな方へ引づつて來た。そのくせ、矢張り自分の方へも引きづりさうにしてゐる。登志子は新橋でここが最後の別れの場となるかもしれないと思つたとき其處にたつ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

てゐる男の顏をこまかくふるえてゐる胸を抱いてヂッと見た。此の男と再び會へるものか會へないものか分らない。若し會へないものとしたら彼女にはそれが一生悲痛な思ひ出として、何時までも忘られないものになるだらう。さう思ふと彼女はじつと男の顏を眺めてゐる勇氣はない。彼女は故鄕の幼い弟に賴まれた飛行機の摸型を買ふのを口實に銀座の通りまで行くと云つて停車塲を出やうとした。改札時間までに間があつたので――

『僕が一緖に行つてやらう』

男は直ぐに氣輕に出て來た。二人は並んで明るい町を歩いた。男は一軒々々それらしい家の前にたつては尋ねてくれたが目的の摸型は見つからなかつた。登志子はもうそんな買物のことなんかどうでもよかつた。もうとても二人きりでは手を握り合ふことも出來まいと思つたのに思ひがない機會を見出したことがうれしくもあり、却つて悲しくも思はれた。

『もつと先まで行けばあるだらうけれども時間がないかもしれない』

『えゝもうよござんす。引き返しませう皆が待つてるでせうから』

二人は其處の角から暗い橫町に這入つて淋しい裏通りを停車塲の方に急いで引き返して行つた。

停車塲の石段をよりそふて上るとき二人は手が痛くなる程强く握り合つた。改札口に近

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

く、まき子の後姿が見えた。傍には世話になつた先生や世話燒き役の田中の小父さん等が一緒にゐた。小父さんは登志子の顏を見ると晝の汽車に後れたことを彼女の爲めだと云つて責めた。登志子の興奮した荒く波立つてゐる心に小父さんの小言は堪へきれない程腹立たしいものだつた。自分に小言を云ふ資格のない人につまらないことを云はれたと云ふことが第一に不快だつた。彼女は熱した唇を震はして眼に一ぱい涙をためて小父さんと云ひ爭つた。――

登志子の新らしい追憶はずん〳〵進んで行つた。やがてそれが現在其處に、門司の停車場に腰かけてゐる自分にまで返つて來たときにしみ〴〵彼女は、親しみの多い一番彼女をいたはつてくれる、同情してくれる、東京からはなれて來たことを思つた。一昨夜だ、さうだつた一昨夜まであすこにゐた。そしてあの人の顏を見て話をした。あの汽車に乘つたばかりに、こんな處に運ばれて來た。おなじつゞいた空の下でおなじ空氣を吸ふてゐて――それでもう駄目だ。彼女はボーッとしてしまつた。眼がクラ〳〵つとした。

場内が何となくざわめいて來て。身つくろいしたり落ち付かないやな風で改札口の方へのぞまに行つたりする人がたくさんある。

「もうあと十五分よ、登志さん」

と聲かけらてあはてゝ立ち上つた。然しまだ十五分だと思ふと拍子ぬけがしたやうだ。

フト其處らの人々を見ると登志子は急に何とも云へない哀しい心細い氣がしだした。登志子はこの旅行の途中大阪で連をはなれて、それから四國にゐる、彼女の爲になつてくれる人を賴つて隱れるつもりでゐたのだ。それを思ひ出すと不案內の土地の停車場でまごついてゐる心細い自分をその時の自分の心持をこの停車場の何處かに見出した。

彼女の心はまた靜んで行つた。彼女の考へてゐることが行きつまるところは矢張りどうしても『駄目』と投げ出さなければならなかつた。さうした言葉がふとしたはづみに大きな吐息に表はれた。はつとした彼女は、つと立つてしまつた。何時の間にかすつかり自分の氣持に釣込まれて、自分に些しの同情もない何にもしらないまき子や殊に自分とは殆んど無關係な安子の前で彼女等の眼をみはらせるやうなかるはずみらしいことをした事が何とはなしに自分に對して忌々しくなつて來て、そのまゝ無茶苦茶に歩いて出口の方へ行つた。車寄のすぐ左の赤いポストが登志子の眼につくと彼女は思ひ出したやうに引き返して袋の中から葉書と鉛筆を出した。そしてまき子のたつてゐる反對の方をむいて葉がきを顏で覆ふやうにして男の居所と名前を手早く書きつけて裏返した。何を書かう? 何にも書けない。彼女の目からは熱い淚が溢れ出た。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『漸く此處まで着きました――』書いて行くうちに眼鏡が曇つて見えなくなつた。書けない。早く書いてしまはなふとしてイラ〳〵して後をふり返るとたんに、

『改札はじめてよ早く行きませう』と急かれる。後の五六字は殆んど無意識に書いた。

汽車に乘つてからも動き出してからも登志子は右側の窓の處に座つて外の方をむいたつきりに固くなつてゐた。汽車が走りはじめてからは彼女は何を考へることも出來なかつた。頭は殆んど働きを止めてしまつた。固くなつてしまつたやうな、からつぽなやうな登志子自身すらどうなのか分らなくなつてまつた。

安子は登志子のもつた雜誌を解りもしない癖に廣げて退屈しのぎに讀んでゐる。まき子はたゞもう四五年ぶりにでも吾家に歸つて行く子供のやうに燥いでゐるのだ。登志子は時々その聲を聞いては、自分とまき子をくらべて見た。

まき子は登志子よりは二つ年上の二十歳だ。それでも父に甘やかされてわがまゝに育つた彼女は一人前の女として物を考へて見ることなんかまるでなかつた。登志子自身にくらべてもずつと幼稚なものにしか思えなかつた。登志子にはまき子の考へたりしたりすることが見てゐられないほど焦れつたかつた。朝夕おなじ室にゐておなじ學校のおなじクラスのおなじ机の前に座つてゐてまき子のやることを一つ殘らず見てゐる登志子はこれが自分

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

よりも二つ年上の從姉と云はれる人かと情ない氣がした。そしては、心の中ではまき子を輕蔑しきつてゐるのだ。從姉ばかりではなくその父――登志子の爲めには叔父――をも彼女は少からず輕蔑してゐた。彼女ははやくから叔父や叔母の自分とまき子に對する仕打ちを批評的な眼で眺めてゐた。彼女の慧い眼は叔父のまき子に對する本能的な殆んど盲目的に近い愛と登志子に對して嚴格な監督者である威嚴を示さうとするその二つのものが登志子の目には始終極端にそぐはぬものになつて極めて不自然に滑稽に見えた。彼女はひとりでその叔父の眞面目くさつた、道學者めいた事を口にするのを見ては心の中で嘲笑つてゐた。叔父や叔母の云ふ事に一として それらしい權威を含んだものはなかつた。彼女には馬鹿にしきつた人にいろ〳〵な事を話したり聞いたりする勇氣はなかつた。何と云はれても聞かれても彼女は默つてゐた。『今に――』と彼女は何時も思つた。

『今に――自分で自分の生活が出來るやうになれば私は默つてやしない。私は大きな聲で自分がいま默つて侮蔑してゐる叔父等の生活を罵つてやる嘲笑つてやる。私は私で生活が出來るやうになりさへすればあんな僞善はやらない。少くともあんな卑劣な根性は自分は持つてはゐない。――』

何時も彼女はこんな事ばかり考へてゐた。そうして叔父と聲を大きくして爭ふ日を待ち

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

かまへてゐた。

何時知らず――しかし登志子は叔父の狡猾な手にかゝつて尊い自己を彼の生活の犠牲に葬られさらうとしてゐた。

世の中は幼稚な單純な登志子の目に映りまた考へる程正直なものでも眞面目なものでもなかつた。生活と云ふこと――殊に實生活を豊かにする事の爲めには惡るがしこい叔父の智慧と敏捷な擧動は最大の利器であつた。登志子は叔父のそれ等の特點をよく知りそしてそれを厭ひながら知らぬ間に彼女自身も何時かその叔父の周到に届いた誤摩化しに乘せられてその利器に觸れたのだ。

『何て馬鹿らしい事だらう? 私はまあ叔父等の安價な生活のたしにされたのだ――』

またぢり〳〵し出した。――嫌やな〳〵その叔父は、私等より十五分も前に長崎から博多について私等を其處で待つてゐる――登志子は眉を昇げてホッと息をした。それ以上考へることは彼女にはとても今の場合出來なかつた。而も汽車は走つて行く。いやな方に〳〵とずる〳〵引きづられて行く――登志子はもう胸元にこみ上げて來る何物かゞグッと上るとすぐにもそれが頭をつきぬけてすつとこの苦しい自分からはなれて行きさうで、それがまた心地よささうにも思はれながら一方にはまた激しい惑亂に墜つること

を愁れてグッと下腹に壓しつけながら目をつぶつた。

何時もはこの汽車の中で聞く言葉の訛りがいかにもなつかしく快よく響くのだが今日はそれどころではない。彼女は連れのまき子等が何を話してゐるか何をしてゐるかそんな事に注意する餘裕はなかつた。彼女は顔を蒼くして窓にかたくなつて凭つてゐた。

『あ着いた〳〵もう箱崎だ、「あと吉塚、」博多だわね』

まき子は勢よく立つて荷物の始末しはじめた。登志子は今更のやうにはつとした。なるべく避けやう〳〵とした時がもう目前にせまつた。

『かまふものか仕方がない、なるやうにしかならないのだ。行きつまる處まで――』

何故かしらこみ上げて來る涙をグッと呑み込んで勢よく彼女はたち上つた。汽車は見覺えのある松原を走つてゐる。松の上からは日蓮の首がニユッと出てゐる。

『來た――博多だ――遂に、遂に――』

地響をさせて入つて來た汽車はプラットホームにそうて長々と着いた。ピタリと汽車の動搖が止むとはげしい混亂が登志子の頭を瞬間に通りすぎた。

まき子が大さわぎして降りる後から登志子は靜かに下車した。降りると少し離れた向側

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の人と人との間にチラと覺えのある叔父の外套の袖が見えて、やがて此方へ急いで來る。續いて來る若い男の顏を見ると登志子は我知らずブル〳〵つと震えた。

『あの男が來てゐる、あの男が――あゝいやだ！　いやだ！』

彼女はクルリと後向いて左あらぬ方を向いた。其處にはまたいま自分等の乘つて來た汽車の窓に向つて大勢の女學生に圍まれた脊の高い男の姿を見出した。登志子は瞳を凝らしてその後姿を見つめてゐた。

『登志さん』

はづんだ從姉の聲に我に返つて手持無沙汰に立つてゐる――永田――夫――に目禮して嫌な叔父に挨拶を濟ました。傲然とかまへた叔父の顏を見、傍にをとなし氣な永田を見出すと彼女は口惜さに胸が一杯になるのだつた。

『うれしかるべき歸省――それが斯くも自分に苦しいものとなつたのもみんな叔父の爲めなのだ。叔父が斯うしたのだ。見もしらぬこの永田が私のすべての自由を握るのか――私を――私を――誰が許した。誰が許した。私はこの尊い自身をいともかるはずみにあんな見もしらぬ男の前に投げ出したことはない。私は自身をそれほど安價にみくびつてはゐない私は、私は――』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

登志子は押し上げて來る歔欷をのんでじつと突いた洋傘の先のあたりに目を落した。熱い涙がポツリ〳〵と眼鏡にあたつてはプラットホームの三和土の上に落ちた。

『お登志さん、行きませう』

と忘れたやうな安子の聲を不意に聞いたときには、まさ子は父と並んで二三間先を階段の方に歩いてゐた。

登志子が階段を上らうとすると後から急ぎ足に來て聲掛けた男がある、さつきの田島だ。

『登志さんでせう、今着いたの、御卒業でおめでたう』

今此處で思ひがけない田島にこうした辭を述べられやうとは豫期しなかつた。田島は去年高師を卒業して此處の師範に赴任した。その人がまだ高師にゐた間登志子は兄さん〳〵と彼を何かにつけて便りにしてゐた。たまには登志子の處を訪ねて來ては後れた英語や數學を教へてくれたりした。併し彼が歸省して女子師範に出るやうになつてからは便りもとかく田島の方から不性にして何時かとだえ勝ちになつてしまつた。その登志子が漸く卒業して歸つて來たのを知らずにこの停車場で偶然に會つたのだ。偶然とは云ひながら今彼に會つたことは登志子は何よりもうれしかつた。何となく話したら自分の方に同情してくれる人だと云ふ氣がする。然し登志子は何にも云ふことが出來なかつた。何か云つたら一ば

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

いにたまつた涙が溢れさうだ。安子が見てゐる。田島は何にもしらない。それに田島の生徒は皆、自分等とはずつと飛びはなれた風姿をした女學生らしい登志子や前の方に行くまき子を目をみはつて眺めながらぞろ〳〵歩いて行く。登志子は何と云つていゝか分らない。併しだまつてゐる譯には行かない。漸くしぼり出したやうな苦しい笑を報ひながら、
『えゝありがたうやつとどうにか――』
と小さな聲で云つて下向いた。
『どうかしたの、眞靑な顏だ、氣分でも惡い?』
『え、少し疲れたからでせう』
『さう、前のはまき子さんと叔父さんだらう』
『えゝ』
階段を降りて入口を出やうとする處で叔父と田島は挨拶を交はした。田島は改めて卒業の祝辭を叔父に云つた。叔父の顏は如何にも滿足氣に輝ひた。
『え、まあどうにかつまづきもなくおかげさまで卒業までに漕ぎつけました。いや然しどうもずいぶん骨が折れましたよ――』
『さうでせう、然しもう大丈夫ですよ御安神が出來ますね、本當に結構でした』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と傍のまき子の方に顔を向けた。叔父は忙しさうにそわ〳〵しながら手荷物の世話などしはじめた。

登志子は呆然とそこに立つてゐた。永田に言葉をかけられることが恐ろしくてたまらなかつた。なるべく彼と面を合せないやうに合はせないやうにと注意しながら立つてゐた。田島にだけは何か云ひたいことがあるやうに思はれていら〳〵した。幾度も二人は顔見合はせた。その度びにお互ひに何か云ひたげな顔をしては默つてゐた。登志子はいよ〳〵たまらなくなつてしまつた。こみ上げて來る涙を呑み込み〳〵洋傘の柄をしつかり握つて、どうかして自分ひとりきりになりたいと願つた。そんなことの出來やう筈がないのは分つてゐながらも。——

暇取ると見て田島はそのうちに宅に來て呉れと云つて歸つてしまつた。愈々其處には安子と永田と登志子になつた。彼女は永田の聲を聞くことが體が震えるほど嫌だつた。なるべく彼と口きかないやうに〳〵と避けて見たけれどとう〳〵機會が來てしまつた。せめて安子とでも何か云つてゐたいのだけれど安子との話にきつと永田も仲間入りするだらうと思ふとまたいやになつて來てどうしても口が開かない。三人ともだまつて其處に立てゐた登志子にはその沈默が苦しく氣味惡くてたまらない。その沈默の破れるときが恐ろしくて

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

たまらない。けれどそれをどうすることも出來ないのだ。はやくまき子でも來てくれゝばいゝと思つては其處らを見まはした。まき子は其處らに見えなかつた。

『隨分おつかれになつたでせう』

登志子はハッとした。併し直ぐ後から氣輕な安子の返事が聞こえたので自分ではなかつたと思ふとホッとした。

丁度そのとき叔父が手荷物の仕末をすまして其處に來た。後からまき子も來た。登志子は息がつけると思つた。併しどうしてもはやかれ後かれあの男と口をきかなければならないと思ふと、なんだか體のアガキがとれないやうな氣がした。その上に、もう十日か二十日もしたらどうしてもあの男の家に行つてあの男と一緒に生活しなければならない――登志子にはそんな不快なことがどうしても出來さうになかつた。

『何故歸つて來たらう』

彼の女はつゞけざまにそればかりを心で繰り返した。

登志子やまき子が歸つて行く處は停車場から三里餘りもあつた。途中でも彼女は身悶えしたいほど不快な遣り場のないおびいたやうな氣持ちに惱まされ續けた。自分のその心持を覺られたくはなかつたけれどもまき子がそわ〳〵嬉しさうな様子をしながら浮つ調子で

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

話してゐるのを見ると、まるきり知らないではないのにもう少し自分の今の氣持に同情があつてもよさゝうなものだ。注意してくれてもよさゝうなものだと云ふ愚痴な、不平な心も起して見たりした。

まき子の家に皆荷物をおろして、一寸立寄たまゝ登志子は松原つゞきの町の家の方へ歩いて行つた。安子はまき子の家に泊ることになつたので登志子と永田とが一緒に歸るのだ。挨拶をしてまき子の家の門口を出るや否や登志子は、後もふりむかずに出來る丈け大いそぎに袴の裾を蹴つて歩いた。彼女は永田が彼女の態度に不快を感じてゐると云ふことは充分に承知してゐた。然し身震ひの出るほどいやなもの聲を聞くのもいやだつた。肩をならべて歩くことなんかとても出來ない。登志子はひたいそぎにいそいだ。それでもをとなしい永田はてく〳〵彼女の後からついて來た。登志子はもうなるべく追ひ付かれないやうに懸命になつて急いだ。永田はとう〳〵こらへきれずに、

『登志さんは馬鹿に足が早いんだね』

と云つた。登志子は返事することも出來なかつた。

家では祖母が出たり這入つたりして彼女を待つてゐた。駈け込むやうに家に這入ると其處にや母や祖母などのなつかし氣な笑顔が並んで彼女を迎へた。一家中の温い息が登志子

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の身邊に集つて彼女のはりつめた心がやう〳〵にほぐれかけた。然し其處にまだ永田がゐると思ふと、泣き度くなつた。いろ〳〵な皆の言葉もすこしも耳には入らない。

『私大變疲れてゐますから夜になるまで小し寢ますよ』

我儘らしく彼の女は袴をとりだした。祖母は今着いたばかりの孫娘の、元氣のない眞青な顏を見るといとしさうに、

『オーそうだらう、長い旅でも汽車の中ではようねむられん、お母さん床を出しておやり』

と眉をよせながら、後から抱えんばかりに登志子と一緒に立つた。

叔母と母は何となく手持無沙汰らしく其處に座つてゐる永田に氣の毒らしく、

『おばあさんがあれなので、どうも――本當にわがまゝで――』

と叔母は取つてつけたやうなお世辭笑ひをしながら永田を慰めるやうな詫びるやうな心持で云つた永田も仕方なしの笑ひを報ひて、だまつて其處らを見まはした。

慧眼な祖叔は去年の夏氣に入らない婚約をされて以來殊更にはげしくなつた登志子の我儘が心配でたまらなかつた。そして、今日登志子がどんな氣持ちで歸つて來たのもよく知つてゐた。だから彼女が家に入つて來たときの樣子からいろ〳〵な點で彼女が嫌ひぬいてゐる永田にあくまでわがまゝを通さないではおかないと云ふあの氣性でどんな態度に出た

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

かと云ふことは見ないでも察しがついてゐた。叔母は、このをとなしい青年を前にしてゐると何よりもまづ分自の大嫌ひな理屈つぽい生意氣な姪の我儘が惡らしくなつた。
『どうしてあんなですかねえ、あゝ我儘がはげしくては、とても家なんかもてるもんぢやありませんよ、一緒にゐるやうになつたらどし〳〵しかりつけてやらなければいけませんよ本當に』
登志子は床をとつてもらうといきなり横になつて深くすつぽりと蒲團を破つた。もうひとりだと思ふと、涙が溢れるやうに流れ出た。何の感もない、たゞ涙が出る、虚心でゐて涙が出る、――ゆるんだ疲れ切つた空虚な心はいつか自から流す涙を見つめながら深い眠りに落ちて行た。

（二、一一、一五）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

粉雪

——小林歌津——

お千代さんは頰がほてつて、あつくつてあつくつてしようがないんで廊下の方へ出たかつた。それでそつと隣りの柳ちやんの手をひつぱつて、

『廊下へ出ないこと』

と小さな聲で聞いてみた。

『うん行つてもいゝや――』

柳ちやんはそう云ひながら、なげ島田に、萌黄色の振袖に腰みのをつけた舞臺の『村雨』のいゝしなにぢいと見入つてゐて中々立ちあがらない。

『さ、行きませうてば』

『いま――少しお待ちよ、もうぢきお終ひだから』

お千代さんはもうぐづ〳〵してゐる柳ちやんは大嫌ひだと思ひながら、自烈度そうに手を離して、

『いゝことよ、そいぢや私一人で行くわ』とつんと後をむいたまゝ、一人ですた〳〵廊下へ出て了つた。

長い袂を胸のところで、たくし上げるやうに抱えながらお千代さんは、そこの柱に寄りかゝつて立つてゐた。

『もう夕方になるんだわ』

前の芝居茶屋の姐さんが、背のびをして電氣を灯けてゐるのを見てそう思つた。――まだ舞臺ぢやあ「須磨寫繪」が幕にならないと見えて、時々陽氣な高音の絲がきこえてくる。――

お千代さんはこゝに自分たつた一人限りでゐるのが何となく心細くつてせうがないけれども先刻あんな不人情を云つて、一緒に來なかつた柳ちやんを二度と呼びに行く氣はない。――欄干にぢつと胸を押しつけて、色々な人の往きかふ往來を見下したりして、我慢をしてゐた。

鑑鼠にかき曇つた空が、もう暮れて行くので、ずんとおどんだ鼠色がその上になほ深くなつて行く空の色――その色は何かの本で讀んだ事のある、心中をした若いお女郎が好きで着てゐる鼠小紋の地色のやうだとお千代さんは思つて見てゐた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『もう雪がぢきふるやうになるんだわ』

　お千代さんは、かう云ふ空のことを雪ぞらだとお母さんがいつか云つた事を思ひ出した。襟元にはふ夕風が、ばかに冷めたいので、お千代さんは自分の顋を兩袖でかこうやうにした。——木の音がする。——手をたゝく音がする。——あゝ幕になつた、とお千代さんはほつとした。

『お千代さん、お前さんおこつたね——』

何時の間にか後に柳ちやんが立つてゐた。

『あゝおこつたの。たんとあんたは、お女房さんの踊つてるのを見てゐらつしやい』

お千代さんは柳ちやんの顔を見ながら云つた。

『馬鹿だね、お千代さんは。そんな下等な事云ふもんぢやないよ』

『どうせ下等でござんすよ。——早く樂屋へ行つて、あぐちやんをあをいでおやんなさいよ』

『あたいの事よか、早くお前さん樂屋へおいでよ、番がもうこの次の次ぢやないか』

『お邪魔なら行きますよ』

お千代さんは柳ちやんの薄笑ひしてゐる顔を、いやつて程袂でぶつてやつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『ひどい人――目が開きやしないよ』

お千代さんは無言つて勝手らしく口の中で『……一夜寐る身を比翼とおもや、立つ名も儘の川千鳥、ゑにしも深き友千鳥、夕浪千鳥やくそくの……』と後をむいて、指さきで拍子をとりながら歌つてゐる。――柳ちやんは、そつと後からお千代さんのかつら下地のわの中にさした大きなくす玉の房の糸が縺れてゐるのを人さし指でほぐしはじめた。――お千代さんはくるりとふりむいて柳ちやんの水色のじばんの襟のところへこぶしを突込んで、くすぐつてやつた。そして二人顔を見合してふっと笑ひくづれて了つた。

『ほんとてば、私怒つてなんかいないの』

『そんならいゝよ。――だけどぶつたりするんだもの。随分ひどいや』

『ごめんなさいね』

『あ、あたいもね』

お千代さんは柳ちやんの博多の帯を爪でしごいて見ながら思ひ出したやうに、

『ね、雪がもう降るといゝわえ』と云つた。

『観音様の市にや、たいてい降るね、十七日か十八日かどつちかに』

『でも雨よ、雪のふることは少くないわ』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『お千代さん、市に羽子板又買ふかい』
『え、あさつて、お父さんとね、買つて來るの』
『しあさつてにはあたいと行かないか。二人きりで――』
『行きませうね。きつと』
『きつとだよ、さ、指切きりでこつきつり――』
柳ちやんは小指を出した。お千代さんの紅のついてゐる小指にからまして、
『きつとだよ』と云つた。
『嘘をつくと、おでこから爪の木が生えますやうに』
お千代さんは柳ちやんの額に爪の痕を付けた。――
　下の往來はもう青いやうな、ぼうとしたやうな色になつてゐる。――お千代さんは薄暗い町をすかすやうにして、
『あら白いもんが、――雪だね柳ちやん、雪が降つて來たんだわ』
と久ばらしくて云ひ出した。
『うそ、あれは、おゝわたゞよ、去年だつて今頃になると飛んで來たよ』
『さうかしら。だけど雪だと面白いのね』

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

二人は顔がすれすれになるやうにして、暗い天から時々落ちて來る白い小さなものを見つめてゐた。――

『お千代さん達こゝにゐたの、あたし方々さがしてゐたの』

二人がふりむいて見るとそこに、目のふちに紅でゑどつた、浴衣を友染の着物に重ねたぬきゑもんで、細い帯をぐるぐる巻にしたまんまの、あぐちやんが立つてゐた。

『え、あついもんだから、こゝへ來てゐたの』

お千代さんは柳ちやんの肩にからんでゐた袂をついとといつて、あぐちやんの肩に手をのせかけて云つた。

『今ね、柳公をいぢめてたの。――あんたの『村雨』ばかりぢいと見てゐて、おかしいんですもの』

『馬鹿、馬鹿お千代さんの馬鹿』

『ほんとよ、ほんとよ、柳公はあぐちやんが大好きなんですつて！』

『よくつてよお千代ちやん、あたし、しらないわ』

お千代さんの手からあぐちやんは肩を辷べらして梯子段の方へ馳けてつた。そしてむこうの方から、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『お師匠さんが、今度の二丁がなつたらお千代さんに樂屋へゐらつしやいつて……』

と云ふなり下へ下りてつて了つた。

『柳ちやん、早くおつかけといでよ。――あたりもう、樂屋へ行こうつと。』

お千代さんもばた〳〵馳けて行つて了つた。

『つまらないな――皆な行ちまふんだもの』

柳ちやんは遠くの方を廻りはじめた、しやつきりした二丁の木の音をきゝながら、無性に淋しい氣持になつて來た。

――見下ろす町も、空もすつかり暗くなくて了つて、向ふのお茶屋の軒の、赤とうす綠で天地を色どつた提灯の灯ばかりが華々しく賑やかに光つてゐる。柳ちやんはその提灯の灯の前にちらちらする、白いやうな、薄黑いやうなものは、やつぱりお〻〻わたぢやなくつて雪らしいと思ひながらいつまでもそこに一人で立つてみてゐた。(完)

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ソニヤ・コヴァレフスキイ自傳―野上彌生子譯―

第二章　パリビノ　家庭劇

ターニャが六つの時お父様が職を辭したので、一家はヴィテブスク州のパリビノと云ふ領地に住むことゝなりました。その頃は農奴が開放せられると云ふ説が一般に傳はつてゐましたから、イヴン・セルゲゼヴィッチは今まで執事に任せきりにしてあつた財產上の取締りにも少し氣をつけなければならなくなりました。つまりラゼフスキイ家に大改革が起つたのであります。不仕だらとか派手どか云ふものが跡を絕つて、ずつと眞面目な生活になりました。

イヴン・セルゲゼヴィッチはこれまでは子供やその敎育の事には少しも構はない方で、そんな事は妻の役目で、良人のする事ではないと思つてゐたからであります。彼は總領なのでアニウタに一番注目してをりました。その上アニウタは悧巧でしたから、それを自慢にして居りました。アニウタが强情だとか、意地惡だとか云はれるのを耳にすると、偶には

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

六ヶ敷い顏を見せた方がいゝとも思つたようでありますが、アニウタはお父様はお腹の中では自分のいたづらを與がつて笑つてゐなさるのだと知り拔いてをりました。小さい子供達は滅多にお父様にはお目にかゝりませんでした。お父様が彼等に逢ふと何か優しい言葉をかけて頰をつゝく丈けの事でありました。たゞ祝典の時なぞ、お父様が觀兵式に臨むと云つて立派な軍服をつけられると、子供達は皆んな「お父様の立派さ加減」を見に客間へ呼ばれました。これは子供達に取つては大した待遇でありました。彼等は嬉しさの餘り手を叩いてはね廻りました。

けれどもパリビノへ引越して間もなく、或る出來事が起つて、それからと云ふものは妙に育兒室に氣を付けるようになつて、誰れも彼もその出來事の爲に深い印象を與へられましたが、殊にターニャにはそう感じられました。

育兒室から色んな物が次ぎ〳〵になくなつて行きました。初めは大して騷ぎ立てもいたしませんでしたが、段々と銀の匙だの、金の指輪だの、小刀だのと、こんなずつと高價な品物が失くなり出したので、皆んなが騷ぎ立てゝ心配し出しました。乾度家の中に誰か盜人がゐるに相違ありません。ニャーニャは、お兒達の持ち物には自分が責任があると思つてゐましたから、どんな事をしてもその盜人を見つけ出そうと決心いたしました。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

勿論第一番に嫌疑のかゝつたのは育兒室附きのフェクルースカといふ娘の子でありました。彼女はこれまで三年も育兒室に使はれてゐましたが、斯んな事は何んにもなかつたのでありました。けれども ニャーニャの云ふところに依ると、これが證據にはならないと云ふのでありました。なにしろまだ年も行かないから品物の價値といふことが分らなんだに相違ないが、『今ぢやあの子も大きくなつて智恵がついて來た』とニャーニャは申しました。『あの子は此村にいくらも 親類があるんだから、屹度盗んだ物はそつちへ持ち出したのだらう』と云つて、ニャーニャはばかに手嚴しくフェクルースカをあしらふものですから、その哀れな娘の子は、自づと自分の疑はれてゐることが分つて、まるでその身が罪人かなんぞのような樣子をしてゐました。

ニャーニャは自分の疑をかけた罪人に嚴しく目をつけては見たけれど、決して現場をさし押へる事は出來ませんでした。それと共に新らたな品物は無くなるのに、前に盗まれた品物は返つて來ません。或日アニウタのお金入れの箱が見えなくなりました。それはニャーニャの戸棚の中に置いてあつたので、少くも四十留ばかり這入つてゐたのでありました。此盗難の事が終に將軍の耳に入りました。ニャーニャは主人の前に呼び出されて、直ぐとその犯人を探し出せと云ふ嚴命を受けました。いよ〳〵大變な事になつたと誰れも皆然う

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

思ひました。ニャーニャはもう迚も駄目だと極めてゐました。ところが或晩ニャーニャはフェクルースカの寐てる隅の方から妙に舌打ちをする音を聞いて目を覺ましました。彼女は變だなと思ひました。用心深く手を伸ばして、マッチをすると直ぐ蠟燭に火をつけました。すると何が目に入つたでせう。毛布の上に蹲まつたフェクルースカが、大きなヂャムの壺を兩膝に挾みながら、麵麭の上皮につけて、一生懸命ヂャムを貪り食つてゐるところでありました。

そのヂャムこそは、つい四五日前女中頭が戸棚から見えなくなつたとこぼしてゐたそのヂャムの壺だつたのであります。

ニャーニャは寢床から飛び出すと素早くその娘の子の髮毛をつかみました。

『とうと目つけちやつた。此の泥棒奴！　お前さんは何處でそのヂャムは取つたのだい。さあ云つて見な。』ニャーニャはその子供を捕へて烈しくこづき廻しました。

『ニャーニャさん然うぢやありません、私取りは致しませんよ。』とフェクルースカは叫びました。『マリヤ・ヴョシルゼエフナに昨夜貰つたのです。あなたにお見せちしやいけないつて云はれたのですもの。』

けれどもニャーニャは此の申し立てには大きな疑ひを持つてをりました。『お前さんも嘘

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

を吐くのは上手でもないね。』と彼女は輕蔑したやうに申しました。『マリヤ・ヴァシルゼエフナがお前さんにヂャムをやるなんて思ふ筈はないぢやないか。』

『でもニャーニャさん、嘘ぢやありません。全くなんですもの。ぢかにあの人に聞いて御覧なさい。昨日私があの人の火熨斗を火に掛けてやつたら、此のヂャムを呉れたのです。「ニャーニャに見せるんぢやないよ。お前さんを甘やかすと云つて私が小言を云はれて了ふからね。」とマリヤ・ヴァシルゼエフナはこれだけきや申しませんでした。』

『まあ、よし〳〵。明日の朝のことにしまよ。』

とニャーニャは返事をいたしました。而してその間にフェクルースカを暗い押入れの中に閉ぢ籠めて仕舞つたので、哀れな娘の子はその中で長い間泣き續けてをりました。

翌朝尋問が始まりました。

マリヤ・ヴァシルゼエフナと云ふのは永年ラゼフスキイ家に住み込んでゐたお針でありました。下婢といふのでなかつたから、他の召使ひ共よりずつといゝ待遇を受けてをりました。その女には自分の部屋があるので、食事も其處で一人でして、家族の食卓には列なりませんでした。非道く氣位ゐの高い女で、他の召使ひ共をば相手にいたしませんでした。仕事が大層上手でしたから家族の人達も大事にしてゐました。『いゝ腕を持つてる』と皆ん

な云つてをりました。四十ばかしでもありませうか、痩せた陰氣らしい顔で、不自然なほど大きな黒い目をしてをりました。いゝ器量と云ふ方ではありまんでしたが、どこか人と違つたところがあつて、たゞのお針と間違へられる氣遣ひはありませんでした。服装もきちんと小綺麗にしてゐて、部屋なども、洒落れた位ゐ、いつも居心地のよさゝうにしてゐました。窓には花物の鉢が置いてあるし、壁には繪が懸けてあるし、色んな細まくした物は隅の吊り棚にしまつてありました。

その上マリヤ・ヴァシルゼェフナには若い頃小説的の挿話があつたので、特別の興味が附き纒つてをりました。健康な綺麗な娘盛りに、田舎に土地を持つてゐる或貴婦人に買はれて召使ひをしてゐました。ところがその貴婦人には一人前になつた息子がありました。此若い男は士官でありました。或時、その士官がお母さんを訪ねて來た時、マリヤ・ヴァシルゼェフナに銀貨を幾らか與りました。運の惡い事には間もなく貴婦人が女中部屋に這入つて來て、その娘の握つてゐるおあしを見ました。

『そのおあしは何處で貰つたのだえ。』

と貴婦人は嚴しく尋ねました。マリヤ・ヴァシルゼェフナは怖ろしさの餘り返事もしないでその銀貨を口に入れてそのまゝ嚥み下して仕舞ひました。すると非道い病氣になつて、苦

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

しさに叫びながら打ち倒れました。命だけは取り留めましたが、長い間病氣をして彼女の美しさは永久に失せました。老貴婦人がその後間もなく亡くなると、若い主人はその女を解放してやりました。

マリヤ・ヴァシルゼェフナはしよつちゆう育兒室へ來てゐましたし、子供達もよく彼女の部屋に行くのが好きでありました。殊に夕方彼女が仕事を止めて、窓際に坐つて片手で頭を支へながら、滅入るような聲で『暗い谷間を通りぬけ』とか、『黑い花、暗い花』と云ふような古い感傷的な俗謠を歌つてゐる時によく子供等は參りました。物悲しくはあつたけれども、ターニャにはこんな時が特別好きでありました。時々マリヤの歌は烈しい咳の爲めに妨げられました。咳がひどくなると全身を打ち震はして、身體が裂けねばよいがと思はれるほどでありました。此咳のためには永年苦んでゐました。

ニャーニャはフェクルースカとの對決のあつた翌る朝、マリヤ・ヴァシルゼェフナに向つて、お前さんはフェクルースカにヂャムを與つたことがありますかと尋ねますと、マリヤ・ヴァシルゼェフナは案の定、びつくらした顏付をしました。

『ニャーニャ、お前さん、まあ飛んでもないことを考へたものですね。私がそんな事をして、あんな子供を甘くすると思ひますか。だいち、私はヂャムなんか買つたことはありま

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

せんもの。』とその女は怒つた調子で答へました。

それ故勿論事件は明白でありました。けれどもフェクルースカはそれにも拘はず非常に圖々しくて、自分には決して覺えのない事だと云ひ張りました。

『だつて、マリヤ・ヴァシルゼェフナ、あなたは皆んな忘れちやつたの。一昨日の晩私をお前さんの部屋に呼び込んでさ、火熨斗のお禮だよつてあのチャムを呉れたぢやありませんか。』とフェクルースカは熱病に罹つたように全身を震はして、やけになつて呼びました。

『うはごと云つてるのだね、フェクルースカ。お前さんは病氣なんだよ。』とマリヤ・ヴァシルゼェフナは落ち着き拂つて答へました。その青白い顏には爪から先ほどの色も洩らしませんでした。

フェクルースカの罪についてはもう疑の餘地もありませんでした。彼女は連れて行かれました。而して家族の人々の部屋からずつと隔たつた小部屋へ閉ぢ籠められました。

『其處に居るんだ、白状するまでは何んにも食べさせやしないよ。』とニャーニャは錠前の中に二度鍵を廻はしながら申しました。

必然のなり行きで、此出來事は家ぢうの噂の種となりました。召使ひ共は一人〳〵ニャーニャを訪ねて來てはその話をいたしました。育兒室は倶樂部室になりました。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

フェクルースカのお父さんは亡くなつてゐましたが、お母さんは近在の村に住んで、時々洗濯の手傳ひに賴まれてゐました。勿論そのお母さんは事の騷ぎを聞きました。それで育兒室へ駈けつけて來て泣いたり叫んだりしながら、娘は知らぬことだと云つて庇ばひました。けれどもニャーニャは直ぐと默らして仕舞ひました。

『ちッ、默つてゐてお吳れ。そんな騷ぎをしないでお吳れ。お前さんの娘の盜つた物を隱してあるところを見つけ出すまで待つてお出でな。』

とニャーニャは申しました。而してさも六ケ敷い顏つきをしてゐたので、その氣の毒な女は怖れをなして、急いで引つ込みました。

皆一般の意見は疑ひもなくフェクルースカをよく申しませんでした。『もしあの女がヂャムを盜つたのなら。』と人々は云ひました。『他の物も矢張り盜つたに違ひない。』それと共に人々はその女に對して怒つてをりました。と云ふのは幾週間も續いたこんな不思議な盜難は、あの男ではあるまいか、又はあの女ではあるまいかと疑はれてるかも知れないとめいめい心配して、皆んなに重荷をしよはせてゐたからでありました。それ故この發見で、皆んなは安堵いたしました。

けれどもフェクルースカを白狀させる事は出來ませんでした。ニャーニャは一日に五六

度も出掛けて行きました。フェクルースカは『私は何んにも盗みは致しません、私を斯うまで意地めるマリヤ・ヴァシルゼェフナに神樣の罰が當るといゝ。』と繰り返して計りゐました。その夜、エレナ・パウロフナは育兒室へ來ました。

『あの娘には余り非道すぎやしないかえ。』と彼女はニャーニャに申しました。『一日なんにも食べさせないなんて事はしない方がいゝよ。』と元氣のない聲で云ひ添へました。

けれどもニャーニャは容赦いたしませんでした。

『奥樣はどう云ふ思召しでございませう。私共が彼奴を氣の毒がる筈はないぢやございませんか。正直な人達にずつと疑ひをかけさせたのもあの女の爲めで、それで自分が泥棒だつたのでございますよ』とニャーニャは非道く決心した風に申しましたので、エレナ・パウロフナは默つて仕舞ひました。而してその哀れな罪人の運命を何んにも緩める事が出來なくて部屋を出て參りました。次ぎの日もフェクルースカはまだ覺えのない事だと云ひ張つてゐますので、裁き人も少し不安になつて參りました。けれどもお晝にニャーニャは勝ち誇つたように叫びながら、夫人のところへ駈けて來ました。『とうと白狀いたしました。』

『それで、何處に盜つた物はあるのかえ』とエレナ・パウフロは一番に聞きました。

『それはまだ申しませんのです』とニャーニャは少したぢろぎながら申しました。『きれぎ

れには色んな事を申したのですが、皆んな忘れて仕舞つたのだそうでございまして、もう暫くあそこへぢつとさして置いて下されば直ぐ思ひ出すだろうと申しますのです』

するど全くその夜フェクルースカはすつかり白狀して、凡ての事柄を逐一申立てました。彼女は賣ろうと思つて盜みをしたのでありました。けれども賣る機會が見つからなかつたので、自分の部屋の隅の敷物の下に隱して置きました。そうと色々な物が見えなくなつて、その盜人の探索が初まると、心配になつて來たから、元々通りに返して置き度いと思ひました。でもそれが出來なかつたから、ハンカチーフに包んで深い池の中に投げ込んで仕舞ひました。

人々はこの氣苦勞な事の始末をつけ度いのが一杯で、誰もフェクルースカの申立てをとや斯くと考へはいたしませんでした。家の人達は盜まれた物が打ち捨てられて仕舞つたのを怒りはしたものゝ、その事實を疑ふものは一人もありませんでした。

罪人はその牢屋から引き出されて、下の如き申渡しを受けました。彼女は十分鞭打つて懲らされた上、母の許へ送り歸される事となりました。

フェクルースカとそのお母さんは泣き悲しんだり、爭つたりいたしましたが、それでもその申渡しは直ぐ樣實行せられて、育兒室には他の娘が雇はれる事となりました。

その内に秩序も回復して、斯んな凡ての出來事は殆んど忘られたようになつてをりました。

けれども或晩皆んな寐て仕舞つて、ニャーニャも丁度臥せらうとしてゐた時に、育兒室の戶がそつと開いて、フェクルースカのお母さんのアレクサンドラと呼ぶ洗濯女が這入つて來ました。この女はどこまでも娘の無實を云ひ張つて、その事に就いて何度もニャーニャと喧嘩をしたものですから、とうと保姆から育兒室に立ち入る事を禁じられたのでありました。

けれどもこの時には、アレクサンドラの顏に常と違つた不思議な表情があつたので、ニャーニャは直ぐと何か大事なことがあるに相違ないと思ひました。

『これはどうです、ニャーニャ』と彼女は誰か聞きはしないかと氣遣しそうに見廻しながら囁いて、前掛の下から小さい眞球具のペンナイフを取り出しました。これは子供達が大事にしてゐたのでありますが、矢張り盜品の一つで、池に投げ込まれたのだと計り思はれてゐたのでありました。

これを見ると共にニャーニャはびつくらして手を組み合はせました。『お前さん何處でこナのイフを見つけた?』とニャーニャは尋ねました。『え\——私が何處でこのナイフを見

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

つけたかと仰しやるんですか。』とアレクサンドラはその時少しの間言葉を切つて、ニャーニャの驚いてゐるのを悦びながら、そつと返事をいたしました。『庭師のフィリップ・マトフゼェジッチに古ヅボンの繕ひを頼まれましたところがね、そのポケットの中に此ナイフがありましたのさ。』

フィリップ・マトフゼェジッチは獨逸生れの者で、上男（うはをとこ）を務めてをりました。獨身者でいゝ給料を取つてをりました。依估のない目には、可なり年取つて、肥つた、赤い頬鬚なぞあつて寧ろいゝ氣持のしない男でありましたが、下婢共からはいゝ男だと思はれてゐました。

ニャーニャは開いた口が塞がらず、何と云つていゝか分りませんでした。

『でも、そんな事が出來られるもんぢやない』と彼女は叫びました。『フィリップ・マトフゼェジッチは育兒室へ足を踏み入れた事もありやしない。どうしてそのナイフを手に入れられるものかね。その上そんな男一匹が子供の物を盗むなんて事は考へられないね』

アレクサンドラは暫くの間、長い嘲りに滿ちた目つきをしてニャーニャを見つめたまゝ、默つてゐました。それから、ニャーニャの耳に口を當てゝ何かひそ〳〵と話しました。その言葉の中にはマリヤ・ヴァシルゼェフナと云ふ名前が何度も繰り返されました。

とうと一脈の眞理の光がニャーニャの疑惑に閉ざされた頭に閃めき渡りました。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『あゝ、分つた、分つた』と彼女は叫びました。『何んて猫かぶりだろう！　何んて悪者だろう！　今に見ろ。正無垢を皆んなに見さしてやるから。』

とニャーニャはぶう〳〵怒つてをりました。

アレクサンドラがずつと前からマリヤ・ヴァシルゼエフナに疑ひをかけてゐたと云ふ事が、後になつて分りました。『アレクサンドラはマリヤと庭師との仲を嗅ぎ出してゐたのでありました。『あんないゝ男が、何かそれ丈けの事をして貰はなくて、あんなお婆さんを可愛がるものですか』と彼女はニャーニャに申しました。『あの女が色んな物をやつて機嫌を取つてるに相違ありませんさ。』

すると間もなくアレクサンドラはマリヤ・ヴァシルゼエフナがその男に品物計りでなく、お金までも與へたりしたのを見つけ出しました。何處でマリヤはそんな物を手に入れたのでせう。そこでアレクサンドラは旨く免がれてゐるマリヤ・ヴァシルゼエフナに對して探偵の方針を定めました。（此章續く）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

天日に　―三ヶ島葭―

暗き額君に射られむたのみしておのが心も語らざりけり

胸苦しこれみなここに滅ぶべき影とはいへど君がかたはら

夢見むか死なむかかかる惑するけふを限の夢に死なしめ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

見て過ぎし心とはいへ今も眼に殘れり君が眞
顏横顏
ゆめうつつにはあらざらむそれよりも悲しき
ことのはじめならまし
捧ぐべきわが身悲しやぬばたまのわが夜は來
ぬと君は叫べど
露だにも君が心に適ふべき命のあらば捧げて
ましを
いやまさるおもひのほかに一目見て盡きしは
何のおもひなりけむ

君去にてやがてなやましこの心なほひるがへる時のあらまし

あめつちになづまぬ心たちまちに悔いてはおのが戀を破れる

君ゆゑのなやましさとはつゆ思はじあゝただわれの弱きゆゑかも

人ありてえ落ちはてぬをたのむまにもどかしむまに一人となりぬ

春をまつよしもなき身と知りながらかるはずみをばせじと誓ひぬ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

頬にうすく匂ふを見ても飽きしみ血吸ひそめてより足らふ日もなし

あやまちに泣かぬ日もなき我ながら君にあやまつよき時のなき

君が目に避くるおのれの見えしてふその危さを知らざりしかな

水仙の花の息にも燃ゆべきかかつ消ゆべきか君があめつち

やうやくに追ると見ればはるけしと言ひていでたつさびしき我は

今せちに思はるる身の苦しさよ死なば欺く心とも見む

美しく死なむともがくわが上に君が笑ひの赤くみなぎる

散る花をさかしまさそふ風あらむ時は逝きぬと君は誇れど

君が目にさる人の顔うつせよとこの夜半たのむ暗ならなくに

忘れむとしたるこの身の痛手見て君はかがやくみ心やえし

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

み心のかがやく見ればかりそめにわが世嘆く
ものをのかしけれ

み力となりてあふれしそのからか我に葬る命
といふは

おのれをば君が命のおくづきと思へど笑める
かんばせの見ゆ

思はるるにもかかはらずこの日なほわがあや
まれる君がほほゑみ

或はまた我にめくらむみ心が花を埋めて暗ぞ
匂へる

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

何といふあさはかさぞと我を見てよするみ眉
の美しきかな

いとかろく一言我はあさましと言へば人みな
手拍ちうなづく

この心今はた何に動くべきさゆらぎなしと君
は倦まむも

いささかも人の思はく思はざるそれを惜めり
それをたのめり

よろこべど償しがたし悔ゆれども恨むよしな
し君が心は

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

盡くるなく我にそそがむみ心はああこの川か
流れ流るる

身にあまる犧牲にかがやく天つ日に我はむな
しき嘆をぞする

今こそは心吸はるる故とせめ君見る力いつあ
りし眼ぞ

この暗のいづくをとれる君ならむ玉の腕も打
まかせつつ

日は空ゆく君は流るる時を越ゆ冬來とかこつ
我を知りつつ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

み別れのしるしに盛りし初雪を君はあましさ
たはむるるかな
み手とらむ心もあらずひたすらにすがりこし
身は火など摑みぬ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜社詠草

川田よし

何處にか消え果つるらむたのみがひあらぬ身のため旅を思へど

旅立たむさなり霞める遠方に消ぬべきものと旅立たむかな

遂につひに誰れをたのまむ自らの身一つさへもたのまれぬもの

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

二十年二十三年たらちねの母の血しほを我が吸ひとりし

なよ〳〵とやせたまひたる母の面子はそむきつゝ默し居るなり

吾子のため母は機をば織りませどひそかに旅に消えゆくものを

そむきたる子は悲しかり紺青の秋の空にも泣きてありけり

みてあれば流れ流れて蜻蛉きぬすゞしの羽に陽の輝きて

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ともすれば泣きくずほるゝ心かな強めむとして町に歩めど

この血しほ若き血しほのかるゝ迄鞭うち給へ悲し母君

流れゆく鮮血(ちしほ)とともに此若さながれて行かば安からましを

徒らに人のなさけをむさぼりし子なればまして旅は悲しき

あゝ一人一人といふもうれしかりかすかに飯も煮え立ちてけり

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ひとりなれば一日默して曇り日のみ空の下に
旅思ひつゝ

またしても涙するかやいふけなき心一つが旅
いとふなり

迷ふ時にあらねば弱き心をば捨てにゆかむと
髪とかしつゝ

ありし日の君の胸べのぬくもりを悲しう思ひ
て秋野來にけり

すいつちよんすいつちよんとなきやめよ女
ひとりのなげく夕べは

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ひそましく花粉こぼれぬコスモスの女一人の
さみしき部屋に

泣きはれし双の瞼のしほらしや一人のがれし
鏡臺の前

片野珠

化粧箱地になげうちてゐみし子になどうたは
する戀を悶を

血をたてに涙をよこに織りしかとあまり生(なま)し
き戀の何と見る

狂ほしき戀の果(はて)なりうす紅にうす墨色に身を
よそはまし

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

新らしき運命にうつる心と心せめて赤かれ消かれとのみ

食べ飽きて眠るほかなき戀ざめの身にふさはじな腦をやむこと

憎しみも愛も嫉みも身にあまる若き女のままにあらせよ

母と子とおなじ迷ひに身もだへて旅より旅の世に生きむとす

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

戯曲 イワノフ（四幕物）――チエホフ作――

第三幕

第六齣

イワノフ。（獨語。）あゝ私は情けない人間だ、哀れな、下らない人間だ。だから丁度あのパーシャのやうな、あれも矢張惨めな、疲れた、古ぼうけた人間が、たゞ那云ふ人間ばかりが、私のやうなものを愛してくれたり、敬つてくれたりしてくれるのだ。私を自分ながら自分を何れ程に輕蔑してゐるか知れない。あゝもう何の位私はこの自分の聲でも、この自分の足音でも、この手でも、この着物でも、自分の思想でも、私を全く其麼に忌々しく思つて憎んでゐるのだらう。餘り馬鹿な話ぢやないか、又如何にも耻辱な次第だ！　まだ一年とは經たない先には、那麼に私を壯健な、精力のあつた、元氣のよかつた人間だつたぢやないか、さうして此の手でよく疲れも知らずに熱心に働いたのぢやないか。或時には無教育な人間をも熱心な演説で泣かせるばかりに感じさせたこともある、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

人の苦しみや、惡に出遇した時には、私はよく泣くことも出來たし憤慨することも出來たのだ。よく夜に、私をあの机に倚りながら、又は空想に耽つて頭を遊ばせながら、一晩中夜の明けるまで座つて靜かな晩の詩的な趣味も、美しさをも味つてゐたこともあつたのだつけ。信仰もあつたのだ。未來を見ることは母親の眼を見るやうに些とも恐れずに見てゐたのだ…… 然し今はもう、あゝッ！ 疲勞て了つて、信仰も無くなつた、何もしないで空しく晝と夜とを費してゐる。もう駄目だ、頭は働かず、手も足も働かん。あゝ自分の土地は譯もなく無くなつて行く、林は無暗と斧に伐り倒されてゐる。（泣く。）自分の土地は孤子となりつゝあるのだ。私は今はもう何も待ちもしない、何にも惜しみもしない。新しい日の來る前には、自分はたゞ云はれん恐しさで、心が顫え亂される……さうしてサラとの初めつからのことについちや奈何だらう？ 生涯愛の變らないのを誓つて、彼が夢にもまだ見たことがないやうな、其の後々の幸福を、私を甚麼に彼女の前に、立派に前以て言つたのぢやないか。彼女を信じた。それから五年の間と云ふもの、私にはさう見えた、彼女は其の自分の犧牲の重さに、自然々々にその生命が消えて行くやうに、彼女をその良心との戰に力が拔けて疲れて了つた。だが、彼女をたゞの一度も私を恨みも爲ず、一言の愚痴もこぼしはしない！…… それだのには私は奈何だ？ 私は

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

心が變つたぢやないか、彼を愛さんやうになつたぢやないか……何故だ？ それは何故だ？ 何の爲にだ？ あゝ解らない。彼女は今甚麼に苦んでゐるか、のみならず、もう此の世に生きてゐる日も已に數へられる身となつてゐるのだ。あゝあ、それだのに、何と云ふことだ、私は臆病者のやうに、あの彼女の青褪めた顏から、あのぺつそりと憔げた胸から、あの自分を賴つてゐるやうな哀れな眼から、私は逃げやうとしてゐるのぢやないか…… 恥づべきだ、實に恥づべきだ！（間。）あのサーシャが私の不幸に同情して、這麼もう老人のやうな自分に愛の打明けをされた時は、私は何だか全く酒にでも醉つて了つたやうに、世の中の萬事を皆忘れて、音樂をきいてゐるやうに夢中になつて思はず叫んだ『新生活！ 幸福！』と、然しもう翌日になれば那樣幸福なんぞは、皆馬鹿々々しくなつて了つて、家の惡魔を信じないと同樣、這麼幸福信じはしない…… ぢや全體私は奈何すれは可いのか？ あゝ私は今甚麼に深い淵に自分を落しつゝあるのか？ 何の爲に恁うも意氣地が無くなつたものだらう？ 自分の神經は奈何なつたのだらう？ 病人の妻が自分の氣儘に對して何か不便なことでもある時とか、或は下女が思ふやうにしなかつたり、或は銃から丸がよく出なかつたりする時なんぞは甚麼に癇癪を起して當り散らすだらう、さんと自分ぢやないやうだ……（間。）解らない！ 解らない！ 奈何

しても、解らないなあ！　あゝもうたゞ額を打拔いて了ふのみだ！……

リヲフ。（登場。）僕は貴方にお話致したいことがあるのです、ニコライ・アレキセエヰチ！

イワノフ。いやドクトル、毎日毎日さうお話を承はらんぢやならんのなら、僕が甚麼に我慢強くなつても到底不可能のことです。

リヲフ。だがお聽入れになるのと、ならんのとは貴方の御隨意です。

イワノフ。僕は貴方のお話を毎日聽いてはゐますが、今以て解らんのです、で、貴方は全體何を僕から要求なさるのですか？

リヲフ。僕は是程に明白に云つてゐるのですが、これをもし解らんと云ふのは、そりや良心のない人間の言葉でせう……

イワノフ。僕は今妻が難かしいことも知つてゐます、又、自分が彼女に對してもう取り返しのならん、許され難い罪のあることも知つてゐます、又貴方が正直な、眞直な人間だと云ふことも矢張知つてゐます。で、未だ貴方は其上に何を僕から要求されるのですか？

リヲフ。いや僕は殘酷極る人間共に對して、憤慨に堪えんのです……女が今將に死なうとしてゐる、彼女には、一度でも死ぬ前にせめても遇ひたいと願つて戀しがつてゐる父も

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

あり、母もあるので。それで彼女の親達は奈何です、娘がもう重體であり、何れ程自分等を戀しがつて、逢ひたがつてゐるかと云ふことも知り拔いてゐるのに、然し鬼か、蛇か、彼等は恰も自分達の信仰と云ふもの丶如何に堅硬なるかを人に示して驚かさうとするもの丶如くに、未だに彼女を其のアナテマから釋いて許さんのです！ さうして又貴方は奈何なのです、貴方こそは彼(あ)の女(かた)が總てのものを、即ち實家でも、自分の良心の平安をまでも、皆犧牲として獻げられた所の、その人ですぞ、然し貴方は今、公然と所謂其の解り切つた目的の爲に、毎日毎日彼のレベデフの許に通つて居るのです！

イワノフ。否、僕はもう二週間も全く彼處は行かんのです……

リヲフ。（彼の言を聞き着けずに。）恁云ふ人には眞直(まつすぐ)に云ふより外はない、短刀直入に。それで、若し貴方は僕の言ふのを聞くのが厭と言ふのなら、御勝手になさるがい丶です。僕は總て有體にものを云ふことは慣れてゐますから……そりや貴方には妻君の死後の新計畫が大に必要なのでせうさうでせう、いやそれは構はんです、構はんとしてもですな、何の爲に貴方にはそれをもう少し待つことが出來ないのですか？ で、若し貴方が妻君を自然に任かせて死なしたなら、詰り、あんな公然と打明けの痛(いた)ましい、非道な大打撃を妻君に加へないならばです、其れが爲にあの澤山な持參金のあるレベデフを取り逃がすこ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

でも云ふ場合なのですか？　今でなく、もうせめて一年か二年の後にすることは出來ないのでしたか。いや、貴方に立派な第二のタヲチユーフ（モリエルの喜劇中の人物の名）です、だからなに、娘なんぞの頭を奈何にでも引搔き廻してやることが出來るのでせう、後になつたつてなにも今のやうに彼女の持參金を取ることは雜作もないことなんでせう……然らば何の爲に貴方はさう急ぐのですか？　何の譯で貴方には、貴方の妻君の死が、一ケ月の後、或は一年の後でなく、只今直ぐに必要なのですか？……

イワノフ。苦痛だ！……ドクトル貴方は惡い醫者ですなあ、人間と云ふものが、さう際限なく自分を抑制へることが出來ると思ひますか、僕が貴方の侮辱に對して、自分を抑へて對へないでゐることが、甚麼に難いことだとは貴方にはお解りにならんと見えますな。

リヲフ。澤山です、貴方は誰れを馬鹿にしやうと思つゐられるのですか？　假面をもうお取りなさい。

イワノフ。まあ、思慮の至つて深い貴方は考へて御覽なさい、貴方の考によると、僕を了解することなんぞは、何よりも容易いと思ふのでせう！　さうでせう？　僕がアーニヤと結婚したのは、彼女から莫大の持參金を得んが爲なので、所が持參金は貰へなかつた、當が外れた、それで僕は他にまた持參金の澤山ある嫁を取りたいので、彼女を虐待する

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

……ねえ、さうでせう？　たゞそれだけで、些とも其れ以上には僕は何にもない人間なのでせう……だが一體人間と云ふものは那樣深みのない、單純な機械同然のものだと思ふのですか……いやドクトルそれは違ふでせう。只一度位の初對面や、二三の外部の表現ばかりで一途に他を判斷して了ふには、人と云ふのには餘りに多くのそれ〴〵の機關がありませう、車もあれば、螺旋もあり、安全瓣もあることでせう。さうだから僕だつても貴方を容易く解りません、貴方も僕をよくは解りますまい、又我々自分自身でも自己と云ふものを全く解することは出來ないでせう。たとひ醫術を神に入つても、必しも人間其物を了解されると極つたものぢやないでせう、まあ、餘り自信を強くなさらん方が可ですな、さうぢやないですか？

リヲフ。然し貴方は何で又那樣不透明な人間だと云ふのですか、又僕がです、何で那樣に曖昧が少なくて、善と惡とを鑑別することも出來ないと僞む言うのですか。

イワノフ。大方僕と貴方とは到底一所に合奏を出來んのでせう……で、僕を最後に貴方に訊きますが、どうか前置をなしにして僕に直ぐに答へて下さい、何が全體貴方には僕から要るのですか、何を貴方は詰るところ要求してゐられるのですか。（彼は怒つて。）さうして僕は何方に申上げるのです、僕の檢事にか、或は僕の妻の醫者になのですか？

リヲフ。左樣僕は醫者です、だから僕は醫者としての正當な要求を貴方にするのです、貴方が其行爲を變更するやうに要求をするのです……貴方の行爲なるものが、正さしくアンナ・ペトロウナを殺しつゝあるのですぞ！

イワノフ。ぢやあ僕が奈何すれば可いのです？　奈何すれば？　若し果して貴方は僕が僕自身を解して居る以上に僕を解してゐられるのなら、どうぞ、さあ、有仰つて頂きたい、奈何すりや可いのですか？

リヲフ。さあ、少くともまあ、那樣にせめて打明けに大平に遣てもらひたくないものですな。

イワノフ。あゝッ！　貴方は自分其物を己に解しちや居らんのでせう？（水を飲む。）もう止して下さい！　僕は神の前には如何にも罪あるものとして千度でも謝するのを敢て辭しませんが、だが貴方は何の權利があつて、さう毎日、毎日僕を責められるのです……

リヲフ。あ、お待ちなさい、それぢや貴方に誰れが又僕の正義を侮辱するの權利を與へましたか？　貴方は僕の心に毒を注入し、苦痛を注入しつゝあるではありませんか、僕は此の郡内に來るまでは、そりや愚人のあるのも、狂人のあるのも、逆上失心の人間のあることも知つてはゐました。だが、人間がさうまで深く考へ盡して、故意に自分の心を

惡に向はしめるやうなもの丶あるのは、未だ嘗つて見なかつたのです……僕は人間なるものを敬して、且つ愛してゐたです、然しながら貴方を見て……

イワノフ。僕は其のことについちや貴方からもう承はつてゐるです！

リヲフ。聞きましか？ （彼を今しも馬乘服で此處に入り來たところのサーシヤを見た。）さあ、今こそ其のお互に解してゐるか、解してゐないのかと云ふことについて、よく解ることでせう！

（肩を縮める、さうして退場。）——第三幕未完——

瀬沼夏葉譯

現代獨逸文藝叢書

土の力、肉の力
靈の努力も遂に境界の壓迫を脱却し得ざるか、
過去現在未來に超絶せる戀の力も、猶ほ理智を盲目たらしむる能はざる近代性格の運命如何、
斯壇の巨匠が此現實を如何に描寫して、如何に大膽に、如何に科學的に文明と社會とを解剖せるかを見よ、

橋本青雨譯

ハウプトマン傑作集第一卷

日の出前

序論 ハウプトマン評傳

津田青楓氏裝禎
菊判美裝函入大金
特價金・壹圓
郵税金十二錢

イプセンを失つた現代文壇の最大巨人は何といつても**ハウプトマン**である、

「日の出前」は其處女作である。
「日の出前」は獨乙新興文藝の曙光である。
「日の出前」は獨乙「自由舞臺」に歴史的意義を與へた唯一の紀念品である。
「日の出前」は自然主義的郷土藝術の典型である。

譯者は唯藝術的良心に訴へて出來得る限りの長い深い努力を之に捧げた、

京都市三條通寺町東入ル
電話中二七六二番
振替口座大阪一一五〇五

南江堂

東京市本郷區湯島切通
電話下谷一三三〇番
振替口座東京一四九番

奥村博氏畫會

奥村氏の作品油畫をほしいと云ふ人が大分にあるし、それにまだそれ程多くの人に知られてゐない作を、一部高級な藝術愛好者の間に是非紹介したいといふ希望から、玆に吾々が發起して同氏の畫會を起した次第です

奥村氏の作品に就ては愛好者諸氏の鑑賞に任せて、多く語るのを欲しませんが、唯その穏健なブラッシに氏の好んで用ふる黒は自ら獨創的品位と氏の個性を表現してゐると思ひます。氏の藝術に同感し共鳴を感ずる人々に、是非此畫會に入會していただきたいと思ひます。

猶氏は大正三年春東京(會場未定)に於て作品展覧會を開かれる筈です。

■甲　八號　額縁付　十二ケ月拂　毎月　貳圓

■乙　スケッチ板　同　八ケ月拂　毎月　壹圓五拾錢

■丙　スケッチ板(小)　同　五ケ月拂　毎月　壹圓

■拂込の最後の月に、申込順に作品をお送り致します。

■申込所（申込こともに最初の分を拂込んで下さればよろしいのです）

東京府下大久保西大久保二〇一白日社内　奥村博氏畫會

東京市小石川區原町十三、宮崎方　奥村博氏畫會

大正二年十一月

發起人

前田夕暮　津田青楓　山村暮鳥　田村俊子　岩野清子　平塚明子

賛助員

相馬御風　宇和川通喩　朝倉文夫　保持白雨　中町初子

夏目漱石先生序　野上彌生子譯

▼▼最新刊▲▲

傳說の時代

特版美裝約八百頁
挿入寫眞五十枚
希臘古彫刻等皆珍品
定價金二圓
郵稅金十二錢

文藝界の大寶庫

神と英雄の物語

▲文學者の寶典　畫家の畫題　說教者の材料　家庭の好讀物也
▲近代上代を通じ西洋文藝を味ふには神話知識が根本的必要也
▲此書は希臘羅馬の神話を初め埃及北歐印度西藏の傳說を含む
▲原書はヴアージルオヴヰツド以下一千餘種古典研究の產物也
▲小說よりも面白く書かれたる人間の想像力の無限大を示せり
▲譯者は今日迄此翻譯の如き興味を以て勞作を續けたる事無し
▲挿入五十個の寫眞は二千年前の彫刻を初め悉く古藝術の珍品

東京市神田區
南神保町十六

尙文堂書店

電話本局四二五四
振替東京一九二四四

モザイク

十二月發行第二十號要目

空氣に醉へる男（小說）　五十嵐禎夫

紅提灯と女と私（小品）　兒玉花外

親の娘（小說）　井田絃聲

怜の話（小說）　山本露葉

猶太の逸話（飜譯）　長澤武男

第二の七日七夜物語（小說　五十頁）　水島爾保布

閃光（小說、二十五頁）　藤井伯民

行樹社展覧會批評　西田長左衛門

定價金二十五錢

東京下谷中根岸六九　モザイク社

毎月一日一回發行
一冊金二十五錢 郵税金一錢五厘

斯道唯一の演劇雑誌

歌舞伎

百六十一號（十二月一日發行）

六冊前金 郵税共金一圓五十錢
十二冊 同上 金二圓八十錢

「ギヨツツ」（ギヨオチ）……鷗外譯
「ヲーレン夫人の職業」の上場……村田實
舞臺協會の公演……佐々木積
「タイフーン」の一員……坪内士行
續無線電話（雁次郎と猿若問題）……室田武里
默阿彌著作解題……河竹繁俊
夜の宿の藝評……ほのほ
何たかさびしい……正宗白鳥
雁次郎「吉田屋」の型……森ほのほ
讀んだ芝居……長者丸
近松座の「藝術座」……廣政法夫
興行版權問題……竹紫其水
「唐人殺し」の話……中村雁次郎
最近の文藝的活動寫眞……旭光
對話「秋の夕」……川村花菱
大小劇場評判記……（青々園、春浦）
藝術座の「サロメ」……中村春雨

東京本郷湯島切通坂町書報社内
歌舞伎發行所
電話下谷四八三 ・ 振替口座一八一〇六

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

十二月號 生活と藝術

定價一冊十八錢
送費金一錢

■街上不平（詩）……土岐哀果
■パンの皮（小說）……仲田勝之助
■滯阪雜記（感想）……島村抱月
■臆病者の記錄……上司小劍
■プーニン小品……播磨楢吉
■街を行きて……西村陽吉
■怠惰の權利（評論）……荒畑寒村
■ショウの超人（評論）……堺利彥
■評論家の態度……稻毛詛風
■ルツソオとトルストイ……T・A
■新らしき歌……青年百余家
■北海道より……大島生
■ヴランダにて……矢口達
■MEMO……哀果生

齋藤茂吉　**赤光**　價九十錢　稅八錢

國木田獨步　**獨步詩集**　價七十錢　稅六錢

三木露風　**露風集**　價九十錢　稅八錢

土岐哀果　**佇みて**　價六十錢　稅六錢

石井柏亭　**歐洲美術遍路**　價一圓八十錢　稅十二錢

三木露風　**白き手の獵人**　價壹圓　稅八錢

發行所　東京市日本橋區檜物町九（振替東京五六一四一番）　東雲堂

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

第五年
第十二卷

スバル

定價三十錢
郵税一錢五厘

十二月號要目

詩 きしのあかしや
詩 茅野蕭々
消火栓 森鷗外譯
歌 北原白秋
朝の影（アルツイバセフ） 中島清譯
歌 原田琴子
原あさを
ソクラテスとランチツテ 林はのほ
アルベルト（トルストイ） 萬造寺齋譯
林中日記 故石川啄木
むく鳥通信 無名氏

東京芝區芝公園五號地
昴發行所
電話芝四七七二

平出修短篇集

瘢痕（キズアト）

四六版三百頁
装釘典雅

一月出版

平出修著
藤島武二畫

森鷗外序
與謝野寛序

著者は偏固の我見に囚へらるゝことなく藝術の大道を歩み來れり。しかも人生慘苦諸相を味盡して心往く直く、純眞なる人格の統一に新なる努力を加へつゝあり、本書収むる處瘢痕、金策、杓子山、絶交、金持の心配、夜烏の諸篇、何れも著者道念の發露にあらざるはなし。

金尾文淵堂
東京麴町區平河町五ノ五
電話番町二〇九三　振替東京三八一七

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

第二巻第三號

近代思想

十二月號

定價金十錢

必然から自由へ（評論）……大杉榮

波濤の歌（散文詩）……荒畑寒村

生存と誤謬（評論）……安成貞雄

貧乏と生活（歌）……安成二郎

冬の夜の村（詩）……土岐哀果

胡麻鹽郎（雜錄）……貝塚澁天

山本飼山の死（評論）……彥、時雄

洪水のやうに（詩）……德永保之助

地獄のドン、ジュアン（脚本）……堺利彥

罷業の宣言（小說）……荒畑寒村

大久保より（雜錄）……寒

東京府下大久保町

近代思想社

振替東京一七一六三

加藤咄堂先生新著

書窓車窓

三六判美本
定價六十錢
郵税八錢

天地の秘奥を探り人心の機微を明にす乃ちこゝに天籟あり地籟あり人籟あり
これによつて世界の知識を求むべくこれによつて古今の徳澤に浴すべし内に
在りては書窓の良師外に出でゝは車窓の善友一巻の書また尊貴なるかな

加藤咄堂先生著書數種

▲**筆と舌** 定價七十錢 郵税八錢

▲**原人論講話** 定價六十錢 郵税八錢

▲和譯**維摩經評註** 定價七十錢 郵税八錢

▲**通俗講話**の理論及**方法** 定價九十錢 郵税八錢

東京小石川區原町 振東京一五六八六 **丙午出版社**　東京小石川區原町 振東京一三五三番 **雜聲堂**

月刊雑誌

エゴ

第二號　十二月一日

「アダムの子供」より(ホイトマン)　成田泰次郎譯
詩　千家元麿
百姓の詩　佐藤惣之助
ホイトマン自叙傳　成田泰次郎譯
野を行けば　成田泰次郎
ストリンベルグ傳　成田泰次郎譯
六號一束　三人
ホイトマン肖像(寫眞版)

東京市牛込區新小川町[illegible]三一[illegible]家方

エゴ社

文藝雜誌

美の廢墟

定價二拾五錢
郵税一錢五厘

拾二月號內容要目

小説 暮るゝ野……石井充

アントンの足……GARSHIN

戲曲 嵐……OSTROVSKY

エウリピデスとバアナアドショウ……NOWOOD

小説 つっぱし[illegible]……立石美和

東京神田今川小路
美の廢墟編輯所
電話本局三〇一六一番

現代の洋畫

每月二回、一日、十五日發行
每號一册 送料共二十錢

十二月一日發行目次

習作（原色版） 竹久夢二
洗濯婦（同） オノレ・ドーミエ
十二階下（同） 正宗得三郎
女の群（寫眞版） ポール・ゴーガン
男の像（同） ロダン
其他數點 —以上插畫
オノレ・ドーミエ 木村莊八
立體派（一） 松本文雄
ゴーホの手紙（二） 栗原誠
象徵論（上） 渡邊吉次
遊戲者の群 淺拔次郎
三崎の海から 成田泰次郎
セザン氏藝術觀（四） 木村莊八

同號附錄（二十號紀念）

ゴーホ畫集（再版增補）

六枚一組特價五十錢
十二月一日發行

日本洋畫協會
神田自由研究所

一、藝術の自由を尊重し一般研究者のために公開す。
二、入會金及申込書等は一切不要。
三、每週月曜日より土曜日迄モデルの姿勢不變。
四、木炭畫は勿論、製作する事も自由。
五、當分の中每日午後一時より同四時まで。
六、畫架、敷物は貸與す。
七、研究費一日六錢、一週間三十三錢
八、モデルは每週婦人或は男の裸體
九、餘な研究する人と認め得る人には男女不論通學を許します。
一〇、研究所は神田仲猿樂町ノ五（神保町順天中學北方空地の奧にあり）所在。
一一、規則書入用の方は申出られよ送ります

日本洋畫協會出版部

東京市小石川區西江戶川町九
振替口座東京四三七三番

新文林

第一巻第十三號　（十二月號）　定價十錢郵稅一錢

◉記念の寶石（戯曲）……シユニッツレル　秦豊吉譯

□ムンクの逸話……

□『文章講壇』反省の心持（本誌獨得の記事）

□小曲十三章（歌）……尾山篤二郎

▼大正二年文壇の回顧……正宗白鳥　小川未明　中村星湖　相馬御風

□新文範…（阿部次郎氏、鈴木三重吉氏、島崎藤村氏）

□改題擴張……（次號より改題擴張す　本號に豫告あり）

□文藝閑話……

◉機織る女（小説）……江馬修

（口繪）
▽ムンク
▽ルクサンブウル博物館彫刻室
▽二作家の若き面影（小川未明氏、中村星湖氏）
▽文學者の故郷（三木露風氏、江馬修氏）

（懸賞文）
▽小説（秋聲選）
▽普通文（雨雀選）
▽短歌（空穗選）
▽俳句（鳴雪選）
▽長詩（編輯局選）
▽短文（編輯局選）

發行所　東京神田今川小路　忠誠堂　振替東京二〇四三一　電話本局四九六六

自由講座叢書第一編

定價金六拾錢　郵税一冊金四錢

東京神田南神保町十六　尚文堂發賣

二六新聞の批評

「近頃になつて文藝趣味は人間の本來性であるが如くに擴まつて來た。そして必然の要求として見られる程に文藝に對する渴望は若い人達の感性を湧き立たしめて來た。此の要求に副ふ目的で生れて來たのが自由講座である。(自由講座同人曰く、自由講座の成立には今少し積極的の目的があります。)本年三月產聲を揚げてから以來每週二回づゝ、人も我も許した大家の講演が開かれて來た。其の講演に隨つて充分の價値と權威が横溢してゐる。その講演を集めたものが即ち此の書物であつて、

△露西亞に於ける文藝と實生話(昇曙夢)
△メレディス論(平田禿木)
△イプセンとドストイエフスキイ(片山伸)
△"サラムボオ"(生田長江)
△ドストイエフスキイの研究(森田草平)
△ヂェームスの哲學(中澤臨川)
△建築美に於ける材料の謎(山崎樂堂)
△問題としての性欲(野上臼川)

の六篇が收められてゐる。眞面目な文藝の研究者にばかりでなく、苟くも文藝に趣味を有つたものには、好箇の參考書であり、文作侶である。同に此の叢書は引き續いて續篇を出すさうである」(十一月十六日)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

本郷座の孤城落月

木兎女

明治座を棄てゝ、本郷座によつた左團次は、自由劇場のボルクマンで摑(つか)んだ新しき俳優といふ、上ッ面の譽め言葉に、あきたらないで、一歩一歩、着實に新作物に努力してゐるのは事實である。そして其の努力といふ一點、更に言換へれば所謂舊派の俳優としては稀に見るほど純(ピユーア)な心持で、感覺と理解とを有つて、文藝に臨むと云つた風な美しい處がある。彼れ一人が踏んで來た路は振返れば、何でもないやうだが、既に俳優になつて居たものには決して誰にも踏み得られる路ではなかつた。私は左團次を見る度に如何にも天分のない才能に欠けた人だと思はない事はないが、それはたゞ要するに舞臺に於ける技巧の問題で尤も彼れを知つて居るものは、兎も角も現今の俳優中單なる技巧の末に走らず、及ばぬながらも常に頭腦で演(や)ろうといふ努力の閃きがある處に彼れの藝其物の生命がある。力(パワー)がある。

然ういふ眞面目の立場(スタンドポイント)から、彼れの努力はイプセンを演じハウプトマンを演(や)り、ゴリキーを演してゐる彼れに取つては多分これは舊俳優としての亡靈(ゴースト)を打破する一方便に過ぎぬかも知れぬ、否然ういふ心掛でありたきものです。半面は彼れが新作を祖國の作家に求めた結果は、紫紅物を演じて飽きたらず、綺堂物に走つて滿足せざるの感があつた。最近には本郷座て「燈籠物語」に五郎作といふ老役を、又歌舞伎座に轉じて小山内氏の「忠臣奇譚」に牢番の親爺を勤めて平生の努力と蘊蓄とを披瀝した、二作ともに紫紅、綺堂兩氏の作に比して、殊に勝れた點のあるといふのではなく、甚だしく劣つて見えるやうな幼稚な點を見出すに難くなかつたにもかゝはらず獨り左團次は、なかなか老役に成功してゐるのを見た。彼れの老役は洋行歸り劈頭第一の出し物たる「ヴェニスの商人」のシヤイロツク以來、ボルクマン、奇蹟の聖者、修善寺物語の木匠夜叉王、黒船の船大工、品川の齋藤の檢校など數へ來れば、彼れの當藝は大體に於て老役にあると云つて差支へない。今度の「沓手鳥(ほとゝぎす)孤城落月」に於ける片桐且元が矢張り其意味で斯役された出し物である。

左團次が歌右衛門の淀君と羽左衛門の秀頼を向ふへ廻して、片桐且元を勤めるやうな立派な役者になつたかと思ふと、彼れが此の十年此方の難戰苦鬪に對して涙の出るやうな一種晴れがましいやうな誇りを感ぜずには居られないであらう。此の坪内博士の作が初めて中村歌右衛門(當時芝翫)の淀君、松本幸四郎(當時高麗藏)の秀頼で東京座に演ぜられた時は、片桐且元は今の段四郎(當時猿之助)が勤めたのであつたが、僅か十年足らずの間に

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

當時の莚升が舊派に於ては此類なき歌右衛門と羽左衛門とを向ふに廻して片桐且元を演じやうなどゝは夢想だも及ばなかつた事である。さいふのは、今の左團次が舊劇に拙く所作に劣つて、殆と俳優として無資格だど極論された程、それほど天分と才能とに欠けてゐるからである。思はず前書の方が長くなつたが、東京座時代の印象をたどりて役々の評に及んで見ませう。

私は少し定刻に後れて、二幕二場「城内山里糒庫(ほしひくら)の場」から見た。即ち淀君秀頼母子最後の場で、此作の尤も集注された力を見るに足る一場である。大坂城の運命今日を限りの血戰恰も酣であるが、天運已に盡きて城内でも上を下へと騒がしい有樣である、然るに豫てより關東に内通する者あつて、火を放ち爲に焔は暴風にあふられて見る〳〵炎に包まれたれば、淀君は秀頼卿、速見、大野等に警護されて、山里の糒庫へ避難せられた場面である。歌右衛門の淀君天下一品極印付きのもので其品位に於いて既に無双の適役誰れが何と云つても、今の帝劇あたりの女優からは、これほどの藝はさておき淀君其人になり得る役者は當分掘り出せさうにもない。女形は全然今の見物には一番だと思はせる第一弱點を有するとは云へ、何合のエレクトラなどに比して如何に歌右衛門が深然たる古典(クラシック)に氣焔をはいてゐるかゞ覗はれて心强い。新しい女優も落付き拂つて淀君を演詬(しいか)かすことの出來る時が、國劇にレコードを作る時である。

然し細い藝を云々すれば淀君のヒステリカルな性格が落城の際に募り募つて、さしもクレオパトラ式女丈夫も狂態のとりとめなき樣は、古いの新しいのと云つた處で、今の若い作家の作よりは力强い背景を有つてゐる丈、それ丈俳優も腕を振ふことが出來る。始終泣いてゐるのはヒステリーの解釋として尤もな譯であるが、たゞ惜しいと思ふことは、内的に强い誇を有つた狂人といふことが出來なかつたこととである。それ故に如何にも纖弱な、女々しい淀君となつて了つた事て、とめとない言葉の端々にも日本四百餘州などゝ云ふ彼女の誇大妄想的な處が表はれゝは猶結構であつたと思ふ。

されども此の淀の方に對して羽左衛門の秀頼は同じく天下一品の適役で緋縅の鎧に晴やかな武裝は、天晴れ右大臣秀頼卿といふ柄に相應しい役であつた。することも決して拙くなく寧ろ當年東京座の高麗藏と比すると何處かに優美な大味のところは嬉しかつた。しかし幾分か寫眞脉を引いた新作になると、只美しいあの璧柄と技巧に過ぎる抑揚自在な臺詞廻しとがはざとらしくつて、一言に之れを云へば型に箝り過ぎてゐる。しかし全體から此作に立戻ると其テン〳〵式の演出法が當を得てゐるのかも知れぬ。私が受けた印銘は其テン〳〵物式情調が一番尊いものかも知れぬ淀君が氏家内膳を捕へて罵言を云ひ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

かけるあたり沃麗無類にして、之を豊臣家の名譽の爲めに刺し殺して返す刃に死出三圖のおん道しるべ仕るといふ秀頼郷を臣下が四方から支へとめるところ總て此作のクライマックスで、また淀君が正氣に返り、秀頼が「恥辱も憤怒も悔恨も……」といふキッカケに淀君が空心で前の方へ出るので其手を取り、「母君にはかへられぬ」の一言熱あり、力あり羽左近來の出來であつた。遊女の正榮尼、市之亟の大藏の局共に淀君の狂態に縋つての愁歎よろし。こんな場で松蔦の饗庭の局はなんさなく勝手惡く、淀君の前へ出ると、不常なれば左團次の向ふに廻つて女主人を引受ける新女形も先ず顔色なくと申しても過言ではない。あゝ藝は勵むべし。

第三幕第一場本丸土手際の場は立廻りあつて別に云ふほどの事なく同第二場櫻御門前の場は片桐且元病軀を提け息出雲守孝利を引具して奥にて駈け付ける左團次の見せ場であるが、呼吸迫つても臺詞はいつもよりは聞取れ、老けた扮裝も貫祿に乏しいさいふ程ではなかつた。たゞ此人一人が歌右や羽左に比して甚しく生硬さ云へは生硬、未製品と申せば未製品だが一脉の新味があつて前途の如何に興味深きかを思はせる。奥から轉げ出るあたり、少しく急ぎ過ぎて餘裕なき破綻を、示すけれど大坂城内の猛火を望み見ての長臺詞は消褩に新しいもので練習をしてゐる丈他の俳優に比して一日の長――さ云ひたけれど實は中日ほどの長があつた。東京座の時の猿之助よりは、遙かに且元其人になつてゐたのは嬉しいと思ふ。最後に云ひたい事は、舞臺に於ける此人は年齢に反して老役に長してゐるのは、或意味に於て不具的な藝風を有つて居るとも云へる、古來名優には若い時敵役專門の人が老いて非常に、和かな藝に入つたさいふ人もあるから、此の人の前途も今の努力が生む何物かゞ大にあるべき筈である。

左團次について批難すべき點は歌右の淀君、羽左の秀頼に比して古典的の味に欠けてゐるさいふと「沓手鳥孤城落月」の如き作風の史劇を演ずるには圓熟した藝が出來てゐないことであるが、同時に厭味のない生氣の溢れてゐることは此度の且元を別としては彼れの將來何物かを攫むべき役者たることを思はせる。左團次が此歴大一座の大役を引受ける事の出來る俳優になつたことゝそれが如何に、薬であるかと云ふことを思はぬのはなかろう。

兎に角十一月の本郷座は左團次一門の錦上更に歌右、羽左の花を添へた面白い芝居であることを付加へておきます。

（十一月十八日）

市村座の「丁字みだれ」

あけは

木兎女さん。――今月の芝居はどこと、どこをお覽んになりました。私はどうもまわり合せが惡くつて今月は、この間の雨のふつた日に、急に思ひたつて、市村座へ行つたきり、まだ羽左の助六も、梅幸も、それから樂しみにしてゐた、「またかのお關」も見に行かれないんです。そのうち、其内つて云つてゐるうちに、もうどこもお終ひになつちまいませうよ。ほんとに思ふやうに芝居の見られなかつた程、ぢれつたい事はありませんわ。――つくづくとそう思ひまず。

この間は、ほんとに急なことだつたんで、もう行つた時には、中幕の「丁字みだれ」が開く一寸前でした。

吉右衞門の盛綱は、何時かの羽左よりも雁次郎よりも、よかつたんですつて――隣の升でほめてゐたのでもの私の胸はせいせいしましたそ。

世間ぢや「丁字みだれ」は常套的な芝居だと云ふ評判ですわ。だけど、私は、心持よくこの芝居を見ることが出來ました。私が常套的なのだからかもしれませんが、外國ものなやたらに、ちよいちよいまぜ合したやうな新作だの、オプラートを燒いて食べるやうな、メーテルリンクを見るより、よつぽど、安心して、のんびりした心持で見ました。分けて、この芝居の舞臺用意のいゝことは、ほんとうに氣持がようございました。

木なして幕が開くさ、鍛冶の家の裏手で、上手には仕事場の小窓があつて、そこには赤い火影がさしてゐる、それから、井戸も、落葉してゐる大木も、その木にかけた張物も、皆んな昏い靑い夕暮の色につゝまれてゐて、無言つて、初霜が、ミシシを外したり、薄紅のやうな小袖をちらちらさせて、水を汲んだりしてゐる、小窓の火影が、ゆらぐたびに、カン、カーンと、鎚音が高くきこえてきたり、どこか遠くのやうな近くのやうなところで、「……ねんねこよ、生れた小狐が」と子守唄を歌つてゐるのがきこえたり、すべて、かうものゝ哀れが、思はれる秋も冷え冷え深くなつた頃の心持が舞臺一ぱいに、ながれてゐました。

そして見てゐる方へも、そうした感んじがしみこんで來るんです。かうした舞臺のかざりつけなしてこれからひらかれて行く鍛冶の家の出來事の前提にした、作者のてぎわには、ほんとうに感心して了ひました。――くらべると云ふことはどつちらにも、大變失禮なことですけれど、これにくらべて、この間の有樂座の「內部」は、この用意が惡かつた（あれは大そう趣向をこらしたものときゝましたが）ために、半割以上の損をしてゐたやうて

すれ。まあお金のかけかたが違ふといへばそれ迄ですけど…

それから舞臺が無名の沙門がかへつて了つて、初霜が一若の手をひつて家に入つて了ふと、木の間から、月のつめたそうな光りがさしてくる、そのうちに、聽落ちの若い男女が、上手から、こゝへさしかゝつてきて、窓の內へ、麻布へ行く道をきく、そして、水をもらつて、女の手をひいて下手へ行つて了ふ、――ちよつとしたことですけど、この若き男女の着附が、いかにも華美で美しかつたのが、よござんした。無名の沙門が來て、これからの凶事の豫言をするのと、この若き男女を出して、窓のなかから見送つてゐる、正國の胸に、遠い昔の、夢をさまさせるのとが、この作のすぐれていいところだと思ひます。

だけど、鍛冶の家のところが廻つて、裏の小藪になつて、そこで、さつきの沙門と、それから浪士守人がたき火をして話してゐるところで、

「御坊案じあるな、刀は明朝早速鑑定いたさう、また今宵中劍難の相ある貞婦を守護いたそう」

「功德無量、御身には現世を救ふ力がある」

と云ふ二人の科白は、いやでした。こゝ迄くると、いかにもお芝居にこしらつてゐるやうで。

役々では、皆な熱心に、それぞれ、役をのみこんで、働いてゐたのは嬉しうございました。菊五郎の從國は正ふに及ばず、芙雀の初霜もいゝ出來でした。吉右衞門の沙門もよござんした。三津五郎の、ひゞの入つたやうな聲は、少し、この芝居の心持を、かきまふすやうで困りましたけど、それでも長い科白はないんでたすかりました。榮三郎は例の通り、ぬうとしてゐたゞけ、大したうま味もなければ、きずもありませんでした。

そしてこの中幕一番の出來は、一若をした八十助とほめてなきませう。――兎に角百人むきのする芝居ぢやありますが、いかにも、作にいゝところがあるのと、役者達の熱心とて、面白い、中幕でした。

…木兎女さん、あんまり長しやべりをしたんで、もう、こゝでは紙がありません。また、來月に、――さよなら。

新刊批評と紹介

予の世界(安倍能成氏著)

安部能成氏の近年の文章――一九〇四の春から一九一三の冬まで――を年代順に集めたもの。自然に關するものが可成り大部分を占めてゐる。他の感想や論文よりも自分にはその方が寧ろうれしく讀まれた。あまり官能的

に自然を見る人の描いた自然は沈んでゐても苦しくなるけれど、心をもつて自然に觸れて行く氏の自然は迫るやうな力は何もないが、又眩いやうな色彩も何もないが、のんびりとしてすが／＼しい。讀んでゐる中に心の開けて行くやうな快さがある。あつさりとしてゐる處に、それでゐてうるほひのある處に心安さがある。束の間の、小さな平和がある。日本人の自然だといふ感じがした。殊に自然を愛する氏の樸木性、自然に對して最も純な、フレッシュな生の歡喜が味はれるといふ氏の心境、又時に人間に對するペシミスチックな心持から自然に走らうとする氏の心の傾向は自分などにはひどく同感しうる處で、氏と自分とは何處かに同じ色の血が流れてゐるやうな氣がする。そして又これは總ての日本人の中に多少なり流れてゐる血ではないかといふやうな氣がする。けれど氏が自から自然に求めてゐられるやうな自然との交渉に達するには氏の今日は前途遼遠と云はればなるまい。今の氏と自然とは素通りの親しみに一歩を進めた位である。そこに得られる生の歡喜も何となく果敢ない、一時的、姑息的のものに過ぎぬ。こんなことは氏に對してはいふ迄もないことだけれど常に我々の前に到る處に奇蹟をむき出しにしてゐる自然に對して奇蹟を求めるに先立つて、其平凡な奇蹟を握りうる迄に自分の主觀が深められて來ないことには、緊張して來ないことにはそれは永久に空しい要求であらう。自然に對することばかり云つて仕舞つたが、その評論も矢張りさら／＼とした粘着力のないもので、特に深い思索も見えず、また精細に論ずるといふこともないが、尋常な、そして片よらない、理解をもつて無雑作に云ひたいことを獨り云つてゐるやうなのが氣持がいゝ。強て奇を好んだり、いやに氣取つたり、衒つたりする處や、内容もないくせに獨り力んでゐる處や、つまらぬ自惚や、高慢の醜さなどの微塵もないのはなつかしい。

　私はまだ氏に御逢ひする機會を得ずにゐるが、「予の世界一巡を通して見た氏は日本人らしい性情を多分にもつてゐられる淡泊な、何處か無頓着で、日常の生活や身まはりのことなどはなげやりにしておくといふやうな種類の氣のおけない人、優しさのある親しみ易い人、正直な、可愛い處のある人のやうに思はれる（らいてう）

芭蕉の臨終（沼波瓊音氏著）

　先月あたりから私には落ちついて物をよむ暇はなかつた。何だか後から追かけられてゐるやうに忙しい。讀みたいと思ふもの、聞きたいとおもふもの、見たいとおもふものは澤山にあつたけれどそれ等を讀んだり見たりする落ちついた余裕はなかつた。今月になつて、やう／＼第一に手にしたのがこの「芭蕉の臨終」だつた。そうして私は、それを近頃になくしんみりとうれしく讀むことが

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

新年號豫告

未定(小說)……水野仙

Kと私……らいてう

未定(小說)……尾島菊子

死の前の粧ひ(小說)……安田皐月

岩吉の話(小說)……藤田一枝

落葉(小說)……松井靜代

未定(小說)……伊藤野枝

夢の似顏(小說)……小林哥津

未定(小說)……加藤みどり

短歌と詩　柴田かよ　岡本かの　望月れい　茅野雅　三ケ島葭

ヲーレン夫人の職業 合評　濟子、花世、KI、かよ、木兎女、みどり、歌津、野枝、白雨、らいてう 其他

イワノフ(戯曲)……瀬沼夏葉

ソニア、コヴアレスキーの自傳……野上彌生譯

獵人(小說)……山田わか譯

女性に於ける性的顚倒……エリス

感想　西崎花世　らいてう　岩野清

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

出來た。

筋はたゞ芭蕉が大坂で病氣にかゝつて死ぬだけの話だが、芭蕉が晩年の內的生活の苦悶―と云ふやうな心理描寫の方面に力を入れて書かれたものらしい。そしてそれが如何にも力一杯に、ねらつたところを外づさずに微細な點一點もおろそかにはせずに書かれたと云ふ處がハッキリと見える。殊に初めの方、新淸水の夕方惟然との對話の處と、滑川の宅へまねかれて行つて御馳走になる處と終りの路通のことを思ひ出して去來に云ひ殘すところなどは一番いゝと思つた。然し全體として見ると、沼波氏の洗練された技巧は、芭蕉その人よりも芭蕉の病床を取り圍んだ弟子達を却つてはつきりと寫し出させてゐる。殊に、其角惟然去來などさして、わざとらしい描寫はしてないが如何にも生々とその人らしく描かれてゐる。そしてこの勝れて描かれた對照によつて芭蕉その人が一層引きたつて見える感がする。芭蕉を中心にして書かれたものだと思ひながらも私にはまづ一番邪氣のない師思ひな惟然が見える。次には四角四面な如何にも手がたいらしい、俳人といふ風な洒落な處の少い去來の世話燒きの姿が見える。一間の愁に沈んだ家の中が暗い空氣にパッと明るみを與へるやうな、粹な江戸ッ子らしいとりなしの、其角の石駄の音がチャラ〳〵聞こえる。まだその他に支考、舍羅、丈草、そして次郞兵衞、皆ちがつた人たちがめい〳〵の心々で芭蕉の事を考へてゐる。皆眞實に師をおもつてゐる。併し芭蕉の暗い煩悶は誰にも解らない。その眞實に自分を思つてくれる弟子たちのうちの誰によつても滿たされない空虛な、大きい寂しみ、心細さはどうすることも出來ない、そのせつない心が更に芭蕉のその苦しみを深刻なものに思はせる。何處かに弟子たちとはぐれた心をもつた芭蕉は、彼が去來の家を訪ふた時に、

「わしを親のやうにあつかふてくれる人が澤山あるそなたもその一人ぢやそれにわしはこの年になつてもその人達を子のやうにすることが出來ぬ。わしは濟まぬと思ふとる」と云つた。親のやうにしてくれる人は澤山ある。併し子のやうにする人はその中には一人もゐない。子のやうにすることの出來ない人たちから親のやうな扱ひをうけることの心苦しさは更に大きな寂しさを誘ひ出すのだ。それ等の氣持がしんみりと强く讀む者の胸に來る。眞面目な態度で力を入れて書かれたものにはいくら圓熟した筆であつても技巧ばかりで書いたものなんか叶はないと思つた。兎に角私はこの頃に稀なよく書かれたものを讀んだと思ふ。たゞ書かなくてもすみさうなと思はれるのは初めのギボンやゴーゴリの名を引つぱり出してあるのだ。あんな飛びはなれた名前をもつて來ることは何だか整つた氣分をこはされるやうな氣持がする。尤も始

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

めの方だからまだ大して據や床に墜ちずに濟んだやうなものだけれど――。（野枝）

ニイチエ研究（文學士和辻哲郎氏著）

近代學藝叢書第貳編。本論の第一では新價値樹立の原理の下に權力意志が種々なる方面から論じられてゐる。就中人格としての權力意志の一卒の如きニイチエ哲學の面目が溌溂として躍動してゐる。本論第二の價値の破壞と建設では批評家としてのニイチエが論じられてゐる。著者が研究の態度は自序に明らかだ。―「自分は正直にニイチエの著者に打突かつて行つた。そこに得られたものは甚だ狹い眼界に限られてゐるかも知れないが、自分に取つて最も重大な事實なのである」「摸倣者自らは……唯「他人の脚」で歩いてゐるのである。自分はこの恥辱に堪え得ないために頑固に自分の幼稚を保持した」「自分は眞正の日本人の血にニイチエと相通ずるものの多量にあるを信じてゐる」―紹介者はこの書が日本に於て現はれたニイチエ研究の第一書であり、燒直してないことを信ずる。外國語でニイチエを研究する人でも是非一讀の必要があると思ふ。紹介者は著者が眞摯なる勞作に對して深く感謝したい。（菊版五八〇頁、定價貳圓五拾錢、日本橋區大傳馬町内田老鶴圃發行）

編輯室より

□この月は創作や飜譯の原稿が澤山集りましたが、頁數に限りがあるため思ふやうに載せられませんで殘念でした。　新年號に廻したものも幾つかありますから左樣御承知下さい。瀨沼さんのイワノフも澤山來てゐましたのを少しゝか出せなかつたのです。あしからず。相馬御風氏譯のアンナカレニナの紹介をこの號でする筈でしたが、少し長い感想が書きたくなつたので、次號に讓りました。

□大坂にいらしつた加藤みどりさんは今度東京に御住ひになることになりました。そして御良人と一緒に雜誌「近代」の編輯に骨を折られるさうです。青鞜の方も創作や批評の方面で今後ますます働いて下さる筈です。

□去る十五日の土曜に同氏の歡迎や補助團員の方々との親睦を兼ねて久しぶりて鴻の巣で小集をいたしました。加藤さんは四つばかりの男の御兒を連れて早くからいらつしやいました。御天氣がわるかつたのか豫定の半分程しか集りませんでしたが、横須賀から岩淵さんがわざわざ上京される。補助團員の松井さんや望月さんなども見える。十人足らずのものが夜の十時頃まで文壇の話や、創作の話や、子供の話や、それからそれ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と色々な雜談に賑やひました。遲れて來た白雨はぢきに眞赤な顏になつて、しきりに、サイコロを轉がしては面白がつてゐました。ダツヂヨン夫人が名刺だけだつたのは當日の一つの淋しさでした。

□ダツヂヨン夫人と云へば、千歳さんは、この月の末に、帝劇で「惡魔の弟子」をなさいます。そのはじめからしまひまで、苦い顏をしておこつてゐるダツヂヨン夫人をなさるんです。それからその次の「負けたる人」では夢遊病にかゝつた伯爵夫人で、ずつと若くなるんださうです。この頃は毎日の稽古ださうです。一日に一度づゝ死ぬのは隨分、いやれ、と同氏は云つてゐらつしやいます。いづれ芝居は拜見して、一月號でだれかが劇評を書く筈。

□新年號の豫告にも書いてあります通り、この四、五、六の三日間有樂座であるとうで社興行のショウの「チーレン夫人の職業」の合評を新年號で發表しやうと思ひます。これは劇評でも、又脚本を御讀みになつての感想、并并ーの評といつたやうなものでもよろしい。社員、補助團員の方は皆さんに、御書き頂きたいと思ひます。豫告のは已に御承諾になつた方のお名だけですが、もつと〳〵多勢の方が意見をお出しになることを希望致します。紙數は五枚以上、二十枚限、〆切は十二月の十日。

□社員の岡本かの子さんはひどい神經衰弱になやまされて今岡田病院に入院してゐらつしやいます。で、あのやさしいお歌も見ることが出來ません。こんな悲しい御手紙が參りました。私共は御健康を回復せられることをそして又あの歌に接することの出來る日を只々祈ります。「もう歌もよめないかと思ひますと生きて居る甲斐もございません。まだ衰へるには早い年齢でございますのに、若い血しほをしぼりつくしてたゞかなしみのみにさいなまれて居ります私、つらうございます。情なうございます。これより外に書けません」

□千葉縣大原の安田皐月さんからこんな手紙が來ました「かなり冷い風になりました。まだ袷を着て寒がつて居ます綿入がまだ出來ないのです。これから濱邊は一日一日と寂しくなります。灰色の砂に人影のない日が暫く暫く續く事でせう。時々は人の顏が穴のあく程見たい事がありますがそんな時は若い叔母の顏でも睨らんで我慢して居ます都の中に飛び出すのもいやですかられ矢張りこゝらが呑氣です。叔母が頻りに大原をよがつて居ます。そして保持さんの大きなお體をこゝまで引張り出したがつて一生懸命なんですよ。大原には山もあります川もあります海も。いゝ叢もあります（但し冬は枯れるんださうです）茅ケ崎の何倍もいゝ處で

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

す編輯室の皆樣を是非一度引張り出したいものです。如何でせう。―

□「青鞜」は今迄よりも毎月早く仕上げればならないことになりましたから、從つて、〆切を嚴重にいたさればならぬことになりました。どうぞ十五日よりおくれない樣に願ます。但し十二月に限り十日。

□補助團會費既納者

小林　哥津―一　月迄―　岩淵　百合―十二月迄―
青　木　穠―二　月迄―　柴田　かよ―十　月迄―
友山　皐月―十一月迄―　坂本　眞琴―一　月迄―
丸島白百合―十　月迄―　齋　賀　琴―十一月迄―
片　野　珠―三　月迄―　下　塚　明―十一月迄―
保　持　研―十一月迄―　滿川　二葉―十　月迄―
西端さかゑ―三　月迄―　望月　れい―十一月迄―
松井　靜代―十一月迄―　濱野　ゆき―十二月迄―
山田　わか―十一月迄―　青井　禎子―十二月迄―
後藤　靜代―一　月迄―　三浦ふくろ―十一月迄―
離　　眞　子―三　月迄―　福田あや子―十一月迄―

□會費は毎月なるべく五日迄にお納め下さい。もし廿日までお納めがないときには廿日に集金を出しますからそのせつ是非お拂ひ込み下さい。

郵券代用の方は、壹錢五厘或は貳錢をお願ひします。

□直接購讀者で前金切れの方はなるべくはやくお拂ひ込み下さい

□補助團會員新入者

加藤みどり　小笠原　貞　青井　禎子
三浦ふくろ　後藤　靜代　上野　葉
瀨沼　夏葉　離　眞子　福田あや子

寄贈書籍

自由講座叢書第一編　尙文堂發行
日の出ハウストマン（橋木青雨譯）　南江堂發行
白き手の獵人（三木露風）　東雲堂發行
赤光（齋藤茂吉）　東雲堂

寄贈雜誌

モザイク　ホトトギス　創作　サンデー
中央公論　早稻田文學　生活と藝術　スバル
婦人評論　みづゑ　假面　創造
藝文　心の花　六合雜誌　處女
新人　新女界　近代思想　詩歌
クワルテット　第三帝國　婦女新聞　歌舞伎
みやこ　美の廢墟　自由講座　奥樣の手帳
朱塔　とりて　音樂　曆盤
自由評論　女學世界　新小說　白樺
新潮　帝國文學　三田文學　相對
自由評論　新愛知

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜社概則

第一條 本社は女子の覺醒を促し、各自の天賦の特性を發揮せしめ、他日女流の天才を生まむ事を目的とす。

第二條 本社を青鞜社と稱す

第三條 本社の事務所を東京府下巣鴨町一ノ一六三に置く

第四條 本社は係員、社員、賛助員よりなる。

第五條 本社の目的を達する爲め左の事業をなす。

一、每月一回機關雜誌青鞜を發刊すること。「青鞜」には係員、社員、賛助員の生活及思想を發表す。(但し補助團員の寄稿を發表することあるべし。

一、圖書出版

一、時々係員、社員の修養及研究會、並に事業上の相談會を開くこと。(但し賛助員は出席隨意たるべし)

一、每年一回大會を開くこと、大會には賛助員を招待し講話を請ふことあるべし。

一、時に旅行を催すこと。

一、本社の事業を達するため別に補助團を組織す。

第六條 係員、社員、賛助員は女子に限る。

第七條 係員は本社の目的に賛同するのみならず。本社の事業を自己の生命とするものにして專ら幹部にありて、直接本社の事業に從事し。自己に その責任を負ふものとす。係員は每月「青鞜」の配布を受く。

第八條 係員は在京社員の中より選擧す。

第九條 係員は四人とし、內二名は經營に、他の二名は編輯に從事す。

第十條 每年九月在京社員會議を開き、係員を改選す。但し再選することを得

第十一條 係員には本社の經濟の許す限りは其勞力に對して多少の報酬をなすものとす。

第十二條 社員は本社の目的に賛同するのみならず本社の事業を自己の生命とするものにして雜誌「青鞜」の配布を受く。

第十三條 社員たらむことを希望する者は住所、姓名、年齡の外に履歷の大體と現在の境遇と入社の動機に十枚以上の原稿と(小說、戲曲、感想、詩歌、評論、飜譯いづれにてもよろし)最近の寫眞とを添へ本社宛申し込まるべし。

第十四條 賛助員は本社の目的に賛同し、雜誌「青鞜」に寄稿することを快諾せられたる文壇の諸先輩とす。賛助員は每月青鞜の配布を受く。

第十五條 本社の事業を經濟的方面より助力するものを補助團員とす。

第十六條 補助團員は補助團規約によつて募集す。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

雜誌規定

■毎月一回一日發行
■定價一册金貳拾五錢（郵稅壹錢五厘）
■前金購讀料（四ヶ月分）壹圓（六ヶ月分）壹圓五拾錢（八ヶ月分）貳圓（十ヶ月分）貳圓五拾錢（一ヶ年分）參圓
■廣告料（一頁）特三十五圓、一等二十圓、二等十五圓、三等十圓、（半頁）七圓
■振替貯金口座は（東京二一一一六青鞜社）に拂込まれたし。
■郵券代用は一錢切手に限る（但し一割增のこと）。
■編輯事務、雜誌購讀、圖書雜誌、補助團會費拂込、廣告申込、交換廣告は青鞜社へ。
■販賣に關する一切の事務は尚文堂へ。
■原稿〆切期日は毎月十日限とす。

大正二年十一月二十八日印刷納本
大正二年十二月一日發行

禁轉載

東京府下巣鴨町字巣鴨一一六三
青鞜社内
編輯兼發行人　中野初

東京市麹町區飯田町五丁目六番地
印刷人　中山千二

東京市麹町區飯田町五丁目六番地
印刷所　大正社

編輯所　東京府下巣鴨町字巣鴨一一六三　青鞜社　振替東京二一一一六番

發賣所　東京市神田區南神保町十六番地　尚文堂書店　電話本局四二五四番　振替東京一九三四四番

會員募集

靑鞜社補助團規約

一、靑鞜社補助團は靑鞜社の事業を完成せしめんがために經濟上の補助をなすを以つて目的とす

二、本團は其目的を遂行せむがために理事一名、外に會計主任及係員を置き一切の業務を處理せしむ。

三、本團は左の方法により九月一日より十二月卅一日迄會員募集をなす。

1、甲種會員　一ケ月會費　壹　圓
2、乙種會員　一ケ月會費　五拾錢

四、本團の會員たらむとするものは其目的に賛同し、第三條の會費を入會の月より滿貳ケ年間納むるものとす。

(但し會費領收は靑鞜紙上に發表し、別に領收書を出さず)

五、本團は會員に對し靑鞜社發行の機關雜誌「靑鞜」を每號贈呈す。

六、甲種會員には會費全納後なほ滿貳ケ年間は雜誌「靑鞜」と靑鞜社出版圖書とを其都度贈呈す。
乙種會員には滿貳ケ年間雜誌靑鞜のみを贈呈す。

七、本團會員は甲種なると乙種なるとに拘らず、女子に限りて「靑鞜」に寄稿し得るの特權を有す。
但し寄稿が二回以上「靑鞜」紙上に掲載されたる場合は本人の希望により相當の手續きを經て靑鞜社の社員たる事を得。

八、入會申込者は期日内に左の書式により府下巣鴨町、一一六三靑鞜社内靑鞜補助團宛に申込まれたき事。
會費は每月五日迄に振替口座東京貳壹壹壹六靑鞜社内補助團宛に拂込まれたき事。(郵券代用一割增)
但し會費未納者には本團より集金人を差向くる筈。

九、會費は大凡三ケ年間確實なる銀行に預金し、其後に於て全金額を靑鞜社に寄附するものとす。

一〇、會計報告は年一回以上便宜の方法を以て會員に發表す。

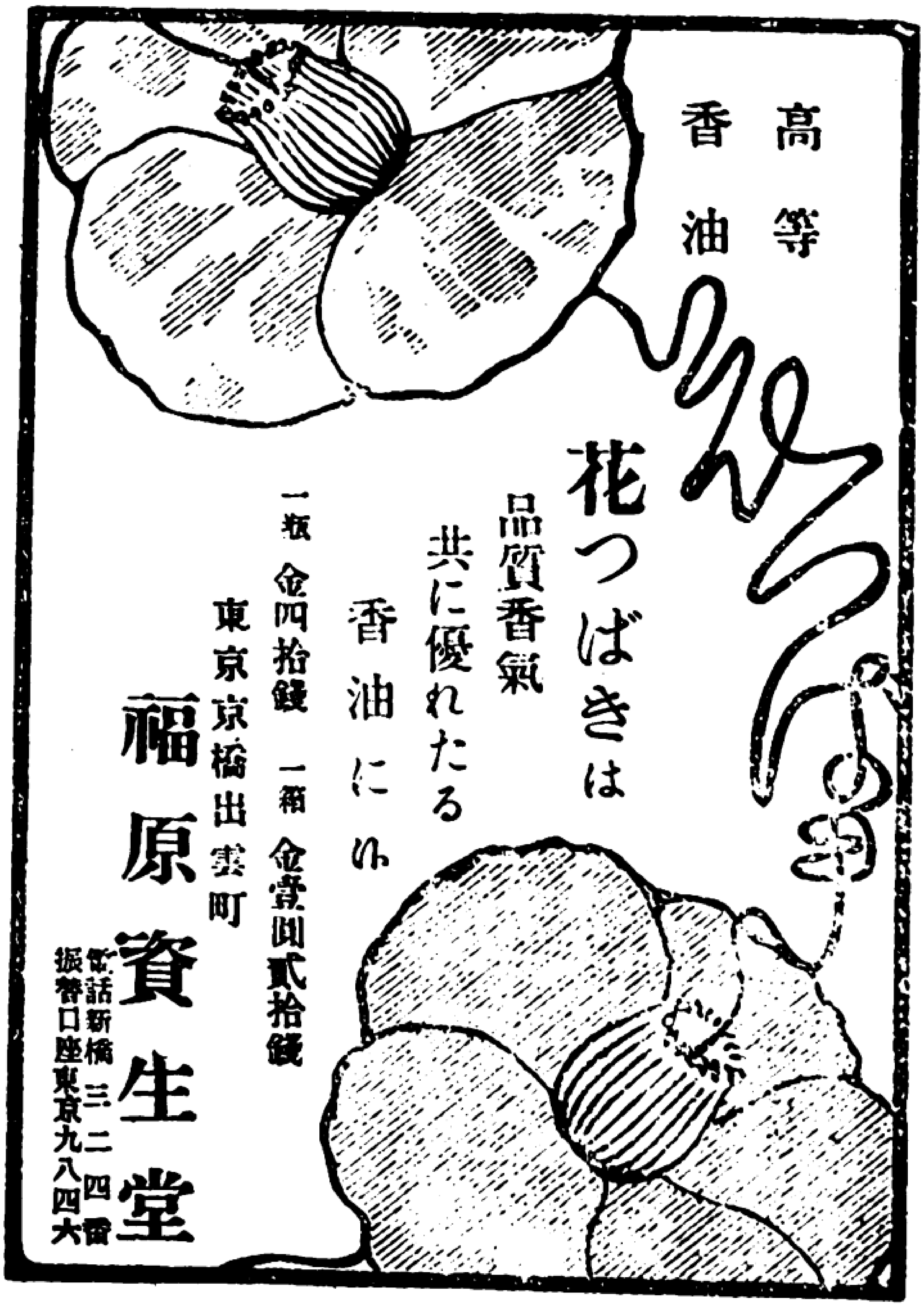
一一、この規約は理事、會計主任、係員によつて事務の細則を定め、又會員多數の意見によりて變更する事を得。

理　事　保　持　白　雨
會計主任　岩　野　清
係　員　伊　藤　野　枝

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER


高等香油
花つばきは
品質香氣
共に優れたる
香油には
一瓶 金四拾錢 一箱 金壹圓貳拾錢
東京京橋出雲町
福原資生堂
電話新橋 三二四番
振替口座東京九八四六

相對（一——六）第一年前半期分　一六六頁

主たる内容

春的經驗　春的氣分

春的性感

焦慮に伴ふ醒覺時の遺精の一例

週期末の特徴（男に於ける）

自慰の意義及び効果　1、2、3、

自慰の實例（女に於ける）　1、2、3、　エリス

自慰の習慣の性的分布　1、2、　エリス

性友及び戀人（非春的性愛と春的性愛）（一）

幼年時代の性愛　ベル

少年時代の性愛　ベル

週期末の煩惱の實例　1、

睡眠中の春的經驗の一例

睡眠中の自發性春的經驗

誣えれらたる自慰

以上

私は性的生活の研究を致して居ります。

本年一月以來「相對」と題する研究錄を出して居ります。

「相對」には原著、翻譯、解說などが載せてあります。

紙數は只今の所では、一年分菊版三百頁内外としてあります。

「相對」は相對會員に限り配布することに致してあります。

會費は半年分金九十錢、一年分金壹圓八十錢（前納）に定めてあります。

御入會下さいますならば仕合せに存じます。

大正二年十一月

東京本郷駒込林町二三〇　小倉清三郎

新しい
女の用
ふる化
粧水と
クリーム

効能を完全に併有する

ハイン

水クリーム

東京ハイン商會

電話本所三九八番

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

月刊美術雜誌

みづゑ

十二月三日發兌

第百六

送料共廿五錢

挿畫

▲自畫像 水彩畫原色版……赤城泰舒
▲石灰小屋(全)……望月省三
▲伊豆の山(全)……八木定祐
▲早稲田(全)……大下藤次郎
▲滑船(水彩畫寫眞版)……石井柏亭
▲搖籃(全)……南薫造
▲其他文展出品畫寫眞版數葉……

記事

▲赤城君と其藝術……矢代幸雄
▲雜感……后樂工志
▲……津田青楓
▲……山宮允
▲風景描寫法……丸山晩霞
▲大下氏の追悼會へ……鵜澤四丁
▲文展所感……水野以文
▲文展批評……

みづゑは本邦最古にして且唯一の水彩畫研究專門雜誌なり水彩畫を描く人は勿論愛好せらるゝ諸士は一日も本誌を座右に欠く可からず

發行所 東京小石川關口駒井町 振替口座東京六九六三番 春鳥會

Digitized by Google

Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

■定價金廿五錢■

假面

■郵稅金二錢■

第二卷十二月號第十號

□濠洲の詩人の群（評論）……西條八十
□空魂（歌）……杉野照子
□ドンファンの失敗（戯曲ベヤリング）……矢口達
□白夜（小説ドストエフスキイ）……石井直三郎
□王領のめざめ（詩）……日夏耿之介
□アナテマの懐疑（評論）……山田檳榔

挿畫
▽この人を見よ……ドオミエ
▽サカプレス……ゴオホ
▽海邊……ムンヒ
▽幼童輪舞……ベツクリン
▽シモネ夫人……ルウヴヰル

□偶件（小説ガルシン）……松田良四郎
□藻鹽草より（感想）……丘草太郎
□假面展覧會瞥見（批評）……大野隆德
□石人（小説ストリンドベルヒ）……竹内逸
□白き手の獵人に送る書（感想）……增野三良
□本誌主催洋畫展覧會の世評を駁す……

モウパッサン作
吉江孤雁譯

水の上

□野口柾夫装幀□新式函入天金頗美本□
□感じのいゝ装釘□氣持のいゝ箱入□
□定價金壹圓□郵稅（内地）金八錢□

■發賣元 振替東京四一二三番 東京市神田區錦町一丁目 中興館■

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

會期

自十一月二十日

至十二月十五日

毎日

自午前九時●至午後四時

入場料

一人金十錢

別に何の意味もなく、舊フユウザン會同人及其知友の作品百四十點を以て展覽會相催し居り候間何卒御來觀被下度願上候　早々

舊フユウザン會同人

舊フユウザン會同人其他油繪展覽會

出品者

小林徳三郎
松村巽
木村莊八
齋藤與里
硲伊之助
眞田久吉
岸田劉生
酒井億尋

三岸花子
宮崎省吾
川上涼花
川村信雄
埴原久和代
淺枝次朗
北山清太郎
山川國三

會場

神田區仲猿樂町五
神田自由研究所内

注意（神保町で下車 順天中學ノ北方空地の奥）

▶來れ習ふは一時習はざるは一生の損◀

▲入會は今日只今思ひ立つ日が吉日▼

正二位勲一等伯爵土方久元閣下
從二位勲一等子爵川村景明閣下
前文部大臣長谷場純孝閣下
其他贊助員 朝野一流ノ學者博士數十名

速成日本習字學會

神田區錦町三丁目六番地（正則英語學校前）
電話本局五二七二番
振替口座東京二五八一五番

束修全免
會費校費共 一ヶ月金六十錢
小學兒童ニ限リ 一ヶ月金五十錢
見よ會費の低廉

主事 文學士 原 龍豐
主任教授 高橋九皐

▲習字は如何にして速達するか

習字速達の良法は字劃を原理的に分解して一々其運筆を會得せしめながら結體を構成するの一あるのみ。是れ最初より手本のみに就き練習すると其遲速の差幾何ぞや。本會主任教授高橋九皐先生は數年の實驗上此良法を案出し未だ速算の素養なき小學兒童に至るまで實地に手を把り懇切叮嚀必ず六ヶ月間に能筆たらしむる事を保證す。請ふ論より證據速に御實驗あらん事を希望いたします。

▲端書又は電話にて御申込次第規則呈送▼

▶地方の會員には本會獨特の通信式教授をなす◀

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

カフエープランタン

此度當プランタンは二階を擴げて食堂を新設致しました一度御來遊を願ひます、私の嗜好は私の店を街中と云ふ感から離し度思つて[illegible]した、そして此度新設した食堂は多少成功したと存じます。

海邊の様な氣持のするヴエランダで日吉町の暗い道を見下ろしながら召上るコーヒーは趣味の無いものではありません。

階下は著名な文士畫家の落書が壁の殆全部をうづめてます、不用意の間にそれ〳〵面目が表はれる所或は極端に皮肉なカリカチユアー一度では見つくせぬ程興味のあるものです。

ドーぞ御來遊の程祈ります、そしてプランタンは常に趣味の上に立つてる事を御覽下さい。

カフエープランタン

松山省三

営業時間　午前十時頃ヨリ午前一時頃迄

テーブルドツト　金壹圓

ランチ　午前十一時ヨリ午後二時迄及午後五時ヨリ七時迄

A 三十錢　B 五十錢

ハンバクステキサンドウ井ツチ
カキフライサンドウ井ツチ　金十二錢

年末年始の御贈答になる様茶菓券を發賣致します

MAISON KONOSU

開業御披露

■私共では此度當木原店へさゝやかなる店を開く事になりました

■毎土曜日には夕刻から「サタデーナイトデナー」を催しまして一般のお客様へ金一圓で澤山のお料理を差上げます

■殊に小宴會を御催し下さる方へはいかやうごも御相談に任せ御便利を計ります

鴻の巣主人敬白

日本橋通壹丁目白木屋横丁きはらだな

◁▷白米◁▷

卸小賣商

樫野梅吉

日本橋區蠣殼町三丁目十三番地

電話浪花四六〇八番

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

セイヨーケンホテル

築地精養軒ホテルは帝都社交界の中心たるの光榮を有せり、弊軒本店は勿論カフエーにクイツクランチに社交の花の咲誇りつゝあるは弊軒主以下一同深く御禮申上候、此上は一つに諸事輕便に勉强を以て江湖の御愛顧に酬ひ奉ること弊軒の義務と一同大車輪に營業振りに向つて一層の努力可仕候
今般弊軒西入口內(農商務省前)に歐米風に則り高尙なるアイスクリームパーラーを新設し最も御簡便に

□アイスクリーム　□アイスカツヒー
□アイスチー　□サンドウヰツチ
□各種洋酒類洋菓子

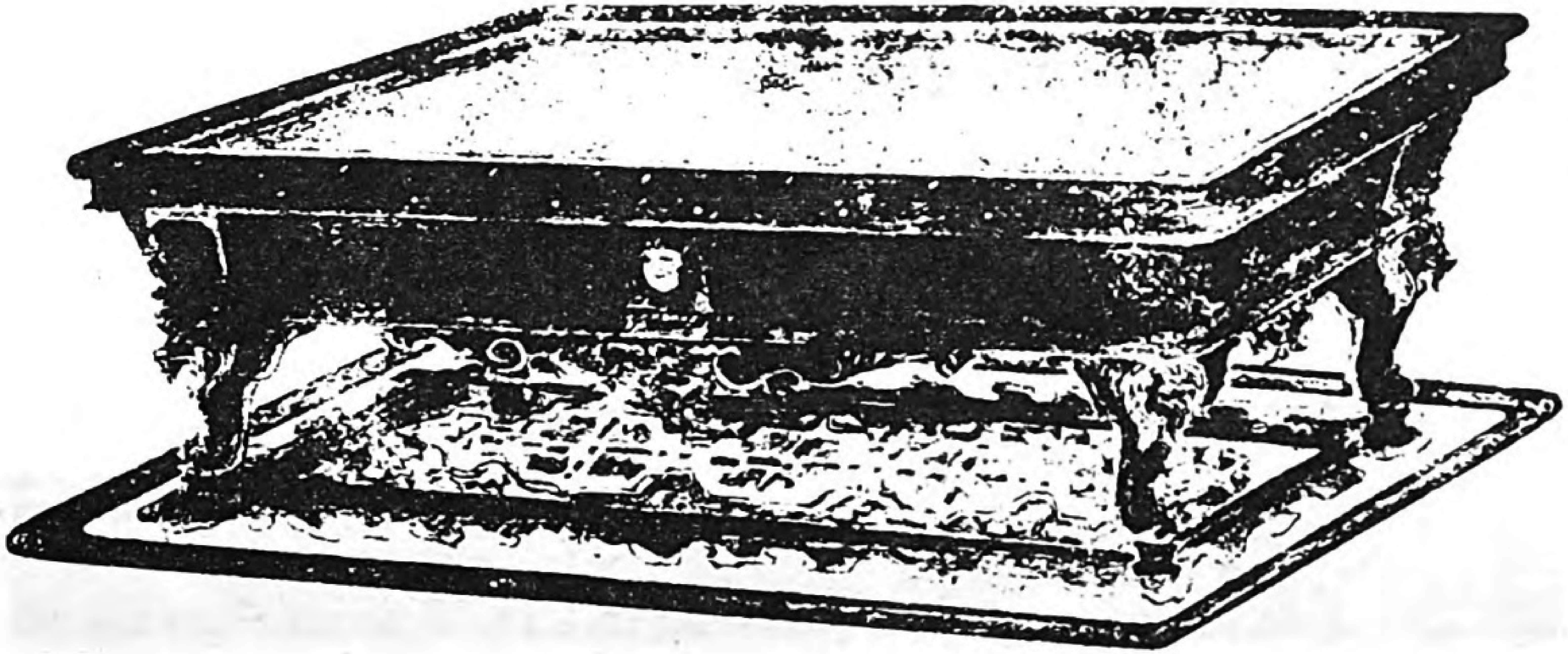
其他を即席調進可仕候間御散策の砌り御休憩旁御家族樣御同伴の上御立寄被下度此段御披露申上候
弊軒ホテルの設備は最新式に依り萬端の調度簡易を旨とし寢室は專用浴室と接續し室內電話を全通し夏季中は煽風器に依り冬季は蒸氣暖房にて溫度を調和し料理酒類は當ホテル特長の一にして給仕に至るまで其道堪能なるものを使用し自働車を常備し音樂團は晩餐中和洋の樂を奏し專ら家庭的趣味を添ゆるに務め申候

本店 築地 **精養軒ホテル**

電話 新橋
- 四六二 ホテル部
- 四六三 西洋料理部
- 四六四 同仕出し部
- 六四八 食堂車部
- 一五六三 洋酒食料品雜貨部

- 支店 上野公園 精養軒ホテル
- 分店 新橋國際 カフエー、シンバシ
- 右同 所內 クイツク、ランチ
- 分店 銀座角 カフエー、ライオン
- 新橋、神戸、下ノ關間直通 列車食堂

最新式玉突臺



玉突臺附屬品一式

御一報次第「カタログ」送呈仕候

東京市京橋區鎗屋町一番地

製造販賣所 中村商店玉突臺販賣所

電話京橋一九六七番

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

賜御愛用願

最も優ぐれたる
御婦人用髪油ハ

本舗

東京市
人形町通堺町
桝筒屋香油店

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜發賣所變更廣告

從來東雲堂にて發賣の處此度當店に變更いたし候につき青鞜販賣に關することは一切尚文堂宛御申越被下度候

神田區南神保町十六番地

尚文堂書店

電話本局四二五四
振替東京一九三四四

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

開業披露

私の名を『みゆき』と申ます。日頃から中野さんと、保持さんとが大變私を可愛がつて下さいまして、どうかして、皆さんの前に丈夫でよく働く、其美しい姿を紹介したいと仰つしやつて、此度『御幸屋』といふ足袋屋を始めて私を世の中に出して下さいました。私はもう嬉しくつて、いつ皆さんの御供が出來るだらうと其をどんなにか樂しみにいたして居りますでせう。どうか御一人でも多く皆さんの仲のよい御友達に私を御紹介下さいまし。私は忠實によろこんで自分の勤めを果したいと思つて居ります。尚私の外にいろ／＼な姉妹が居ります。どうかそれも私同樣に可愛いがつてやつて下さいまし御願ひ申ます。

「青鞜」を讀んでゐらつしやる方には特別御ひいきを願ひます。

大正貳年十一月

發賣所

麴町區飯田町六ノ[illegible]

御幸屋足袋店

中野初

保持研

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

十二月一日より

歳末年始御贈答品賣出し

食器新製品陳列會

十二月十日より

羽子板賣出し

何れも盛大に開會仕候間賑々しく御來觀下され度奉願上候

東京駿河町

三越呉服店

振替貯金口座東京三〇〇番

昭和44年9月15日発行　【第5回配本】

青鞜第3巻　12月号

編著者	平塚らいてう
発行者	藤原正人
発行所	(株)明治文献
印刷	江明印刷
製本	(株)三高製本

【分売はいたしません】　定価 4,500円

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ASN
PER
XL
756
S45
V.3
no.12

50 126CO XL 187
04/09 30016-160 HF Group

University of Colorado at [redacted]
[redacted] 6746369

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

明治四十四年六月二十八日第三種郵便物認可 第三巻

ASN
PL
756
W6
S45
v.3
no.7-12
1913

University of Colorado at Boulder
U18304 7799909

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

PASCAL
Dep P Mod 2 Ran 04 Sect 11 Shelf 21 Tray 08 Item 009

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER